打つのであったが、これは記録で現わせないのは残念である。
安里さんの場合は、戦争といういまわしいものに遭遇しては、富裕な人も、差別のない苦難と悲惨さが容赦なく降って湧く例も示している。

## 米須ウシ（五十三歳）　家事

アメリカーが屋宜原に上陸しましたから、兵隊が島尻へ行きなさいとふれ歩いたので、すぐあわてて行きましたよ。荷物は頭に乗せたりかついだりしてですよ。宜野湾（村）に近い中城村の北上原に一日だけいて、すぐ首里に行っています。首里（市）には可なり長くいました。一か月くらいいました。首里の平良でありましたが、隠れては、人の植えてある芋を掘って来て食べていました。こっちからは持って行ってないので、人の畑の芋を掘って来て食べていました。
家族は、おばあさん、あの時に七十四になりました。杖をついて歩きました。嫁と、嫁の子が三人、わたくしの孫ですが、上が女で十一になりました。中が男で十歳、下は女で八つで、家族六人でした。
首里からは安里（具志頭村）の村（字部落のこと）に行きました。島尻の入口の、津嘉山（南風原村）という村（を経由）に。もうあの時のことは、話しも出来ません。安里は津嘉山の後です。でもあの時は激しくて、どこがどこやらわかりません。その時は八つなる子供の手を引いているんですから、そうして子供は、水飲みたい、水飲み度いといって、どうにもならないようなあんばいで、苦労しました。
それから歩き通して前川（玉城村）の壕に行きました。前川には大きな壕がありました。そこに長らくいましたよ、食べ物は、嫁が出て行って、芋を掘って来ては、罐詰殻（中味を食べたあとの空罐のこと）で、煮て食べました。芋掘りは夜でありました。今頃（午後七時）から出て行きました。アメリカーたちの弾は夜はよかったんです昼よりも（夜は砲爆撃が少なかったという意味）。
前川にもいられませんので、そこから真壁（村）の新垣に行きました。そこで嫁はいなくなりました。破片が飛んで来て、腹に入りまして、仕方ありません。一度にすぐ死んでしまいました。小さい家に十人くらい入っていましたが、これは真向うにいたのでした。子供たちもみんなそこにいたんですが、これに当りまして、おばあさんに、ここに（左の二の腕の肘の近くを示す）当って嫁の方へ走って行っていますよ。子供たちにも当りませんし、わたしも嫁と並んでいたんですが、この嫁は、日本兵が、匐うようにといいましたのに、匐わなかったかもしれません。日本兵は、沖縄の人の着物を着ていましたよ。弾が来る時は、この日本兵が匐うんだ、匐うんだと叫けんでいましたよ。もうその時からは、きまって（日本が負けたことがはっきりしていたの意）いました。飛行機もずっと下を飛んでいました。
捕虜は、新垣の村（旧藩時代は今の字を村またはシマといっていた。現在も使われている）で取られました。われわれは、野っ原の小松林にひそんでいましたが、そこへいきなり来ていました。わた



したちは、もう殺されるんだといって、生きるということは、できないと諦めていました。トラックに乗れといいますから、連れて行って、海の中にこぼして捨てるのだなと思いました。野原の小松林の中にいっしょにいた人は、ずいぶん大勢でしたよ。わたしたちは嫁はまけて（死んだ）家族は五人でありましたが、トラックの一ぱいずつ連れて行っては、また来て人をつんで行き、それを何度もくり返していましたよ。
それから百名（玉城村）に集合しましたが、すぐ知念の村（字部落をいう）に移されて、そこにスガキ（山原船などが目的地への途中、天候などの都合で、途中に仮舶すること。仮りに留まること）していましたが、そこではしたたか（非常に）苦労しましたよ。いるところは、人の家から戸を盗んで来て、それを斜に立てて、下は敷物が無いから、茅を苅りて来て敷いて、雨が降ってざくざくしますから、それをかき捨てて、また茅を苅りて来て敷くんです。
おばあさんは、手の怪我はよくなっていましたが、そこで壕負け（栄養失調）して亡くなりました。
それで、そんなあわれ（難儀苦労）は生れてそんなのは当って見ないんですから、あわれでありましたよ。子供三人つれてですね。この子たちは小さいのですから、わたしはわたし一人で芽芋（掘り取ったあとに残っている芋）をほじくって来て食べさせて、ああしたりこうしたりして学校も少し行かしました。知念の村で。しかし学校も学校というものではありませんでした。配給というのはありました米も。ほんの少しずつで、それではどうにもなりませんでした。男手のあるところでは、心配ありませんでしたよ、壕からさがして持って来て。
もっとも酷かったのは首里でした。墓に入っていましたが、その墓がドシンとしまして、その時も大変苦労しました。長い間食べない日がつずいて、ひもじい思いをしました。
それから、割り当てで富里（玉城村）に行って、つぎは、中城（村）の新垣に、新垣に二か月ばかりいて安谷屋に、それから屋宜原に帰りました。
子供等の学校は、バラス（運びか）の仕事をさせるために、そんなに満足にやることはできませんでした、上の子は。
知念でのことですが、新里（佐敷村）の部落に、戸を盗みに行った時は、わたしがおそくなっても帰らないから、男の子は一人残して行きましたので、わたし一人になるんだなあ、とずいぶん泣いたそうです。まだ憶えていると思います、その子は。戸を盗んで来ないと、雨に濡れますのでね。それでそこで捕えられて、それを取ってはいかんというので、一日中止めておかれました。
わたしの主人は、戦争前に、三十歳くらいの時に亡くなりました。
三人の子供（孫）等の父親は、ヒリッピンに行っていましたが、あっちで兵隊に取られて、そのまま帰って来ません。二男、弟の方もヒリッピンに行っていましたがこれも兵隊に取られて、長男と同じで、戦争で死にまして帰って来ません。
子供（長男の子供）たち三人は大きくなって子供もできています。孫（曾孫）が沢山います。
註、　話は極めてたどたどしいが、戦争当時の苦労がほぼ推察で

きる。殊に米須さんが戦争に追われて、南部へ逃げまどっている家族構成を考えると、どんなにか苦しみさいなまれ、かつ悲しい思いをされたか、頼みにしていた嫁は砲火で即死。長男と二男は共にヒリッピンに出征（二人共戦死して帰らなかった）。そうして七十四歳の姑と、三人の幼い孫をつれて雨霰と降る戦火から守って、生きのびさせた。しかし姑は捕虜収容生活中に栄養失調で亡くなった。

五十三歳の米須さんの三人の幼い孫との戦後生活も容易ならぬ苦難の道であったにちがいない。ゆっくり突っ込んで話して貰えば、戦火に追われた時、また戦後の生活、その苦難のさまざまのことがくわしくわかると思うが、本篇では紙数の関係からそこまで精細に記録するのは許されない。

## 仲村長康（三十五歳）　村配給係、村商業組合長

統制経済でありましたから、各村に配給品の一括受け取りをきめて、村から各部落（字）に割り当て、部落は部落で各家庭に配給するんですね。

わたしは、再度防衛召集が来ましたが、村の配給関係で、召集が免除になって行くことができませんでした。

米は食糧営団から直接、各部落に割り当て、それも部落で各家庭に、規準によって配給されました。

お酒は、冠婚葬祭、それから戦勝の祝賀など、村役所から切符を貰って、それに依って配給されるというふうにしていました。お酒というのは、泡盛ですが、お祝いは、戦争前の昭和十六、七年頃から、そう多くはなかったんですし、あっても、一升瓶の二、三本がせいぜいで、一升とか、わずか二合ということもありました。

お酒は全村の配給をわたしが一括して取って来て各部落に配って置くようにしました。煙草は、部落ごとに一か所、取扱い店を定めて個人に、平等に配給しました。

米は、本土米ではなくて、外米ですね、多分シャム米ではなかったかと思うんですが。

配給は、三月三十日まで行なわれました。わたくしは、配給するというので皆集めてあったんです。そうすると、屋良飛行場（現在の嘉手納飛行場）が空襲されて、朝早くから、ぱんぱん音がして黒い煙が出るもんですから、兵隊さんに訊いて見たんですよ。音が屋良飛行場からこえて来るし、そのたびに黒い煙が立っているが、あれは何んですかといったら、何かの目標でないかね、といってわからないんですよ。そうして配給をはじめました。そうしたらピュウと物凄い音で喜舎場のうしろの方に信管みたいなのが落ちたんです。それを見たもんで、配給取りに来た人を解散させました。少しは配給をすましていたんです。これは三十日ですね、その晩ですがね、兵隊さんが危いからというもんだから、おばあさん、妻、長女、次女、三女らの六名の家族は国頭が安全と兵隊さんからききましたので、北部を目あてに歩き出しました。金武（村）の手前で夜が明けてですよ、空襲が激しくなってですね、そこに山があるんですよ。そこを目がけて、攻撃するんです。それが大変な激しさです。ばんばんやるんです。あとできいたが、船舶特攻隊の特攻船の隠し



場所だったそうです。それで一日中攻撃するんです。橋がありますからね、小さい橋ですが、どうにかようやくその下に坐れたんです。

日が暮れてから出て、それから久志村の近くの古知屋に行った。もう入り交じって（米軍が来た意味らしい）いるんですよ。友軍はすでに越えていない。それで大騒ぎですよ。

それからまた、三原（旧久志村）の福地又というところですがね、中城村の疎開地ですよ。その日は山に泊りましてね。山にそのまま眠るんですよ、草なんか敷いて。フトンなんかは古知屋においてあるんですからね。そのつぎの日、古知屋へ蒲団類を取りに行く場合にですね、アメリカが出て来てすぐピストル。それであちこちしらべて、よろしいというので、それで通して貰って行ったらカーブがあるんですよ。それでカーブを歩いて行ったら、そこには三百人くらいの人がいる。道から通る人をみんな集める。そうして集まっているんですよ。それで若いもんだから呼び出されたんです。通訳もおりましたが、あんまりはっきり英語がわかっていないようでしたね。

いろいろ訊いてから、車に乗れというので、いつ殺されるかという恐怖心を持ちながら車に乗ったんです。

行ったところは名護町でした。憲兵隊本部と日本字で書いて立て札が立ててあったですね。そこへ行ったら訊問ですよ。小銃を持ったり、拳銃を持たしたりしてから、羽地村の仲尾次に連れられて行って、「ここは収容所にしようと思う、避難民の。それでお前はそこで配給をしてくれ」といった。しかしいつやられるかわからんと、絶えずひやひやした気持でいたんですが。ところが、その事務の証明を渡された。そのうえ、国頭郡だけは、歩ける許可証もくれたですね。

それで妻子のいるところをさがして、フトンを古知屋から取って、母親や妻子にやって来たいといったら、それでは三日くらいしたら来なさいということですね。その証明を持っておれば、どこでも歩くことが出来るというんですね。これはいいことだと思って、源河（羽地村）を目がけてですね、もう逃げることだと思って、そこから立ち去ったんですよね。それで、その途中、源河行かない前に、ずらっとテントが張ってあるんですね。それで、びっくりですよ。証明は持っているが、機関銃も据えつけてあるから。それでここはもうひやひやですよ、殺されると大変だと思って。そうしたら、あっちからもこっちからも引っ張りだこですよ。連中は沖縄人をこれまで見たことがないから。恐るおそる近寄って行ったら、お菓子やら煙草やらいろんなものをやるんですな。それで証明を見せたら、ああ、そうか、通っていいよ、といって通してくれました。それで源河に行って、山を見て、大体見当をつけて、久志に行ったですよ。そうしてここへもアメリカーが来るかと思って、中部（中頭地方）へ行くほかはないと思いながらその前にまず家族のところを訪ねました。中城の人たちは、川沿いに、家族が坐っていられるくらいの小さい家、それも匍うようにしてかがんで入る小屋です。

わたくしは、家族にだけは、捕虜なって、逃げて来たことを知らしましたが、それがもし日本軍にきかれたら撃たれて殺されることはきまっている、そう考えて、ここから早く逃げることだ、と決め

た。

それで中部へ向って、家族を引きつれて出発したんですね。その途中で珍らしかったのは、屋良飛行場に入り込んでしまったことで、それは昼は歩けないし夜歩くのだからわからないんですね。そして屋良飛行場に入り込んだら、まっ黒いものが沢山あるから、さわって見たら滑べっこいですね。あっちにもこっちにもいっぱいあるんです。爆弾だとわかりました。そこに来るまでには二十四、五名になっていますからね。戻りなさい、ここは危いからとみんなにいって戻ろうとしたら、子供たちは、泣くんですね。ところがそこには監視の兵隊がいるんですがね、見ているが、撃たないんですよ。人民だとわかってであったでしょうね。笑っていたですよ。それで、皆ゆっくりゆっくりそこを出たんですがね。それから泡瀬（美里村）の上まで出て、昼寝していたんです。その時、与那原町の人といったと憶えていますが、ひもじいから食べようといって、布呂敷包を持って来たら、ちょうどそこへアメリカーが七、八名でした。トラックに乗って来て、銃口をわれわれに向けて、布呂敷を開け終るまで、突きつけていましたよ。中から出たのは芋ですよ。それでそれを見て笑っておったですね。

そこで、これに乗りなさいといって、トラックに乗せられて、前原（具志川村）に送られて行きました。最初はどこに持って行かれるかとずいぶん不安でしたが、前原とわかったので、あっちには先発隊がいると聞いていましたので、心を明るくしました。行って見ると、あまりにも沢山の人がいるからですね、こんなにも大勢人がいるかなと思いました。証明を持っていましたが、逃げて来たのがばれると酷い目にあわされると思って隠してですね、またしらべられました。それでどうせ戦争だからと思ってですね、嘘をついて、年を四十六といってですね、いいだしたのだからいまさら間違っていたとは言われないんです。自分の年を間違える人はいないですからね。もうそのまま押し通すほかはないと、やっていましたのが、どうしたのかばれて、呼び出されてうんと叱られました。その前に、前原で区長になっていましたので、仕事は何をしているかと訊くもんですから、前原の区長しているといったら、そうしたらすっかり態度が変って、ああ、そうか、と喜んでですね。それでは早く帰って仕事をしなさいとゆるされました。それは、大体四十五までは小屋にまとめて入れてある。わたしは区長している関係もあるので小屋に入らないで、戸籍にも四十六と書いてあったから事務所へ帰りました。高江州（具志川村）の学校が残っていまして、そこが事務所になっていました。区長というのは、前原区全体の区長ではなくて、それは、われわれのようにある一つの地区の区長とはちがいます。わたくしは前原の高江州の区長になっていたんです。

前原は食料も、ほかの生活必需品も、そう困りませんでした。区長の仕事のおもなことは、戸籍作りですね。

市長は、あとで那覇市長になった小嶺幸慶さん（沖縄タイムス刊沖縄年鑑によると、戦後の那覇市長に小嶺幸慶の氏名はない、多分談者の記憶違いか、何かの間違いでないかと思う）でしたが、呼び出されて、あなたは、ここの配給主任になってくれといわれましたのでしたが、今までみんな泡瀬の人が配給を取扱っていましたので、人がやっている仕事をやるわけにはいけません、それで抜け



出すほかはないと考えているところへ、喜舎場へ先発隊が行くということになったから、それで、ここで配給主任になって、売店を経営することになりました。

戦争中で一番苦労したというより、こわかったのは、屋良飛行場に入り込んだことですね。あの時は、子供等は泣き出すんですね。監視の兵隊がいることがわかった時は、撃たれるかと思ったんですが。

それから危険で、殺されるのだと思ったことはたびたびあったのに、そのたびに、反対にアメリカーに却って、いい待遇へ一変しました。それは、わたくしは不思議に運が良かったのでしょうか。

家族は全部無事でした。上の子は歩かして、二人はおぶって久志から中部へ来たんですが、今は三人共、結婚して孫も大勢できました。

註、　仲村さん一家のような幸運な家族は、今度の戦争で、極めて稀である。本人が言っていられる通り、危険なところへ来たと思ったら却って米兵に優遇される、珍らしい例である。六人の家族が無疵で、今度の戦争を切りぬけた。不思議な感がする。今度の戦争みたいな時には運というものがあるのだろう。

## 玉城トミ（二十三歳）　家事

家族は、おじいさん、おばあさん、父と母、子供はわたくしが一番上で、七人、男は下から二番目で一人だけです。わたしのすぐ下の二女は、小学校の高等科二年でありましたが、学童疎開で九州に行っていました。おとうさんとおかあさんは、同じ年で四十五、六でした。三女は上のと年子で一つちがい、四女が十二歳、五女は九歳、長男が七歳、一番下は四つでありました。

防空壕は自分の字内に掘ってありましたが、急に敵が来ましてね、壕に入っていました。日が暮れてからでありましたが、字の上からパラパラパラ音がして来ましたんで、びっくりしまして、芋の澱粉を作って置いてありましたから、それと、炊いてあった御飯と、芋の煮てあるのだけをあわてて持って、着たままだけで飛び出しました。それから安谷屋の後に出て、安谷屋の後から野嵩（宜野湾村）に出まして、南の方へ、わき目もふらず歩きつずけました。ところが昼は通れませんのですから、夕方になりますと、芋葛を湯のみ茶碗に入れて、水で溶かして、それを一杯ずつ飲もうねといって、それを飲んでは歩き、また歩きつずけるというあんばいでありました。その芋葛はやっと与那原（大里村＝現在の与那原町）辺までではありましたが、与那原を越えてしまいますと、食べるものは何もありませんから、まあ、いくさ世だから、命を保つためだもの、他人の物ではあるが、畑の芋をほじくって来て食べようではないかといって、夜に少しずつ取って来て食べていましたが、そうして東風平（村）へ越えて行きました。東風平の壕には二十日ぐらいいました。与那原まで来る間は、人の家の垣根の下に隠れたりして暮しました。

東風平は、どこの部落ということはわかりませんでしたが、そこでは、壕に入っていました。雨が漏りましてね。着ている着物がず

ぶ濡れになりますが、着換えは持っていませんから、着たままでかわかすようにしていました。この壕でお父さんが、無理に防衛隊に取られました。東風平の壕は、山の横腹に作ってありましたから、右へも左へも、それから上の方にも出られるように、三ところに出入り口が出来ていました。長雨でありましたので、水はうんと溜りました。ぼんぼんして。

壕には東風平の村の人も大勢入っていました。あちこちから来た人たちも入っていました。つき当り次第、皆、弾が恐いんですから、すぐ飛び込むというふうにして、入っていました。

お父さんは防衛隊に取られましたので、食事は、夜に出かけて、畑に行って芋をほじくってきて、それを、畦を鍬で作りましてね。そこに、一斗カンがありますね。あれに芋を入れて、煙を出さないようにして、煮まして一つずつ食べました。一日に一つずつ。子供たちは、ひもじいよう、ひもじいよう、といって泣きつずけますので二つずつくれて、朝一食だけでした。芋を取って来ることができた場合には、こうして食べましたが、取ることができない場合には、あんまり子供等がひもじいようと泣き通しだもんだから、甘蔗みたいなものをさがして来て、それをくれてくらすこともありました。なにもない場合は、食べませんで、子供だちは、ひもじいよう、ひもじいようと泣きつずけていました。

この壕が攻められてですね、艦砲もなにもかも、弾があんまり激しくなりましたので、いることができなくなりました。一ぱい入っていた沢山の人でありましたが、ひとりも残りません。みんなこの壕から出ました。

それから、そこから越えまして、越えた村は、真栄平（旧真壁村＝現在の糸満町）といってありますかね、わたくしは、あちこちしかわかりません。真栄平というところに、二晩ぐらいいましたが、またそこから越えて、村むらはまったく名がわからないんですよ。真栄平というところから越えまして、そのつぎは国吉（旧高嶺村）・真栄里（同村）といいますかね。喜屋武（村）、摩文仁（村）というとどうなりましようかね。石がうんと割られていましたね。弾に当って。そこが喜屋武、摩文仁といいましたでしようね。村の名はよくわからないのですよ。ええ、八重瀬岳でしようね。八重瀬岳。八重瀬岳の上に小さい部落がありましたよ。そこはあまり激しくて、大変やられていました弾で。真白くなっていました。岩です。山の岩（八重瀬は稜線になって北面が崖になっていて、岳の概念とは異り、崖上はほとんど台地状である）に弾がばんばん当っていました。その八重瀬岳の上の方にいましたが、ここも激しくておられませんでした。わたくしたちがいたところは八重瀬岳の上の小さい部落だったんです。真栄平からはどうして、どこを歩いたのかわかりません。夜の道ですからね、あてなしに、いつもおびえて歩いているのですから。

それから国吉・真栄里。それでは、国吉・真栄里・新垣は、真栄平の隣りになっているんですかね。そうするとわたしたちは、行ったり帰ったり、あちこち、迷って歩いたわけになっていますね。ところが何というのでしようね、戦に追われていますからどこへ行くという当てはないのですから。



八重瀬の上の小さな部落からは真栄里というところへ行きまして、そこでは、着物も着るものがありません。人の家の屋敷の小さい竹垣の下にですね、木の下に、他人の炊事竈の石のかたわらに入っていましたが、あんまりそこに弾がバンバン落ち散りしたから、ここにもおられません。この家の後の木の下に入っていましたが、この家から戸をはずして来まして、上に戸を置いて過していました。ちょうどここで、ここ怪我しまして、（左の頬から鼻へかけて手で示す）ここをたたき切られまして、ここ全部はがれて引っくり反っていました。ここはこんなに疵があります。薬といってはありませんので、そのまましておくと虫が出ましたよ。それで塩をつけて助かりましたが。そこでわたくしたちの隣りのおばあさんもいっしょでありましたが、この人はここ（首）をすぐたたき切られました。わたしは怪我していますので、自分の怪我を苦しんでいますから、ひとのことまで見ることはできません。ひとの話をきいているのでありますが、あっという間もなく、首をやられて、髪の毛が屋敷のどこかに引っかかっていましてね、それを取って来まして。それからわたしたちのお父さんの兄弟でありましたが、ここで八名でありました。八名が全部たたっ斬られましてね、肉切れ、その肉ですね、肉が散りぢりばらばら、あちこちに全部飛び散ってですね、誰が誰やらぜんぜんわからなくなっているわけです。それでこなごなになった肉が飛び散っているのですから。その時まではわたしたちの女の親も元気にいましたし、また親類のおばさんも元気でありましたから、あれたちが笊をさがしてきて、肉のこなごなに飛び散っているのを拾い集めて、あっただけを、艦砲で凹んでいる穴がありました。そこに入れまして土で軽く埋めておいたわけでありました。わたしは怪我で苦しんでいたのでありますから、こうこうしたよと、わたしがようやくひとの話も聞くことができるようになってから後、話を聞いたわけであります。後で遺骨も取って来たのでありますが、ちょうどその場合には、あんまり激しいのでありますから、わたしも、こんなに顔を上にあげますと、こんこん中へ血は流れまして、それでこれは毒気の血、弾の血は毒だから、これを喉に落すと大変だからうつ向いていなさい、と言われましたから、着ている着物をかき脱いで、こんなに被うていましたが、この着物をしばらくして搾りましたら、ここから出た血がほんとに搾られました。そうして、つぎからつぎと、たえまなくばらばら弾が落ち通しでありますからね。もうここにもあんまり激しくておられません、親たちは。わたしはそのまま、ここにです。歩くことも出来ません。真栄里に、寝たままになっていましたが、その時において、もう、どうせわたしは命は無いよお母さん、こんなに多くのウットヌチャー（弟妹たち）みな、ほかのみんなについて行って、どこで助かるかわからないから、早くみなさんがカゲー（保護）して下さる間に、これだけの弟妹を守ってみなさんで連れて行って下さい、といいましたら、そうか、でもお前ひとり残してはわれわれはどこへも行かれない。皆もろともである。みんなはやっていいからここにいよう、というから、わたしは生きられないよ。今日目を閉じるやら、明日目を閉ぢるかという立場になっているのだから、わたしひとりのために、これだけ多くのおとうとたちを死なしてはいけないから、さあ、前の村へでもどこへでも皆が行きなさるところへ追う

て行って下さい、とわたしが女の親に頼みましてです。それで女たちは向こうへ越えてから、ちょうど海岸であったそうでありまして、もうそれ以上は陸地はなかったそうであります。海でありました。喜屋武の岬ですかな。そこ行くまでに女親はいなくなりまして、また一番下の四歳なるのもここで亡くなりました。またこの男の子も女親がいなくなりましたからこれもここでいなくなりまして、皆、ちりぢりばらばらになりました。一番下の二人はお母さんとともにいなくなりました。それからパラパラパラして木の間から、いま残っている妹たちの話でありますが、わたしは別べつにわかれてからの話であります。そうして、パラパラパラ激しくなりましたので、そこから逃げようとしましたら、お母さんはすぐ倒れて三人はそこで亡くなっています。わたしはまた、真栄里で捕虜取られました。四日目という時に。怪我した翌日は、ようやく匐って水飲みに。水をさがして。立つことはできませんので、手と足で匐いずり廻っているうちに、金属製のドビンに行き当りました。そうしてそのドビンを持って水をさがしましたら、水溜りからでした。ドビンに水を半分くらいその水溜りから汲みましたが、力がありません。出血が沢山のあとでありましたし、飯も食べませんから、このドビンを持つことができません。ドビンに水を入れたのは、その時は雨がよく降っていましたから、くぼんだところには水が溜っていました。それでも半分くらいしかドビンを寝かして入れることができませんでした。それでドビンをモンペーの紐にくくりつけて、下げて持って行きました。この水を、一度に腹いっぱい飲んで見たいなと思いはしますが、匐って汲んで来たのであるから、モンペーにくくりつけてあるドビンから、一滴、二滴、喉を湿おすくらいしか飲まない、こんなに苦しんで過していました。四日間、こうして過した時にアメリカーが来まして、食べなさい、食べなさい、といって菓子をくれようとしましたが、毒ではないだろうかと思って食べません。それで食べて見せてから、くれようとしましたが、恐くて食べませんでした。そうしてとうとう捕虜に取られました。

真栄里で捕虜取られまして、玉城村のどこかわかりません。わたしは若いのですから。それでテントが沢山張られているところへ連れて行かれて、一晩泊って、翌日の十二時頃に、コザの美里というところへ連れて行かれました。何といいましたかね。嘉陽小（ぐわ）といったと思います。そこの家畜小屋にいました。わたくしは、家族がちりぢりばらばら、ひとりだけであります。自分のたより（知り合い）といってもいませんから、つれて行こうとすると恐がって、どこにつれられて行くかわからないから、わたしはここにいて、命を捨ててもいい、わたしひとりだけ生きているのだろうと思って、もう何ののぞみもないから、どうなってもいいという心で、親もいない、おとうとやいもうとたちもいない、病院に行って治療もしたくないと思っておりました。

そうして治療しにも行きませんでしたが、ぜんぜんわからない人でありましたのに、煮て食べなさいといって、これくらい（両手で輪をつくって示す）肉をくれてありました。中頭で捕虜取られた人は島尻にいた人よりも物は有りますから、お肉をこれくらいくれましたから、有難うといって頂きまして、これに塩をつけまして、ここに（怪我した顔を示す）くっつけてはくっつけくっつけして、病



院にはぜんぜん治療しには行きません。ようやくぶらぶら、杖でちょっと歩ける時に、知らない人でありましたが、病院まで行こうね、お前のものをこのまましてはいけないよ、このまましておくと大変だよ、といいましたから、大へん有難うございます。わたしは体がどうにもなりませんのですから行くことができません。足がはこばれないのであります。助けて下さるのはニヘー（二拝、感謝）でありますが、歩けないのであります、といいましたら、お前が歩けないならわたしがカゲー（援助）てやるから、行こうではないかといいますので、そうですか、そんなに助けて下さるのでありますのなら命を助けて下さいといって、この戸口くらいまで歩いては、十分くらいは坐って、また少し歩いては坐って、またも歩いて、そうして蒲原の病院まで行きましたが、そこでは麻酔も何もかけないで、見えるところからは疵が残るから見えないこと、股のここから切ってくっつけると、お前のものは不具者にはならないよ、立派になるから、さあやろうじゃないか、といいました。それでも体は痩せおとろえてしまっているのですから、ここを切らしたら死ぬよりほかはありませんよね。それで、まあ、お断りして置きます。生き肉を切って、そこにくっつけるより、かたわになってもいいですから、もうようございますといいまして、それからは、人がくれてあった肉に塩をつけて、そこへくっつけてはやりやりして、もっぱら自分治療ばかりして、このようにしました。

わたしを病院へ連れていった人は四十くらいのおばさんで、中城の方といいましたが、あの時は、何が何やらわからん。あの人はどこの人だったかな、見たら見分けがつくがねとその人のことは、今につけていつも沙汰（噂）しておるんですが。その人は、行くときも帰るときもわたしを援けてわたしがおったところまでつれて来てくれました。

この美里の家にいるようになったのは、本部といってありましたがね。本部に受け附けなければなりませんのね。本部に受け附けてから、どこそこの家はどれだけ入っているといって配給の割り当がありますよね。どこの家に何十名入っている、あそこの家には何十名入っているというところのそれがありますから、それから紙で番号札というのがありました。針金で穴をあけて、それを一つずつくれて、どこどこへと分配して、その家につれて行かれたわけでありました。

食事はほんの少しずつ、鍋といってはありませんからカンカラ（罐詰の空殻）にですよ。みんな元気のある何のさわりもない人はあちこちからあがなって（さがし求めて）来まして、鍋もあれば、作業も行って、食物から野菜も何も人のものからも取って来てあったんだが、自分のようなものは、ただ配給くれる分だけで、米粒の一つ二つ、お粥のうわ湯みたいなものですよ。そうして食べなければ、配給では、そうする分しかありませんでしたからね。

そのようにしていましたが、自分が歩けるようになって、作業にも行くようになってからは、少し特配というのがありましたので、よくなりました。

お父さんや妹たちのことはですね、わたしが、親も兄弟も皆いなくなって、自分一人だけだから生きていて何になるかといって、まるで気が狂れたようになって、ふらふらしていた時に、わたしたち

の部落のおばさんに行きあいましたら、おい、お前のお父さんや妹たちも、山原にいられるよ、といいましたから、そうですか。わたし一人ではなくして、親も兄弟もいはしますか。ほんとうのことですか、というとお父さんも妹たちも、あっちにいるよといって知されました。

お父さんと妹たちのいるところは、山原の久志小（ぐわー）といいました。わたしが美里のそこに（蒲原）いるということがわかって、一度はお父さんが面会しに来てくれました。あの時は親子でも、分配されて別れていますから、勝手には、いっしょにいることはできないのでありましたので、わたしはそのままいました。お父さんや妹たちは安谷屋に移動なって来ましたから、お父さんがお願いしまして、これひとり美里で苦しい生活（立タラン立チ）をしていて作業もひどいので、考えて貰えませんかと、そこの班長みたような係りに言い訳けをして、それから安谷屋にお父さんに連れられて来てその時からいっしょになっているようになりました。

お父さんは防衛隊でありましたから、みんなちりぢりになっていました。お父さんや妹たちが、久志の山にいるということだけを聞きましたが、お父さんと妹たちが、どこでどうしていっしょになったのか、わたくしは わたくし ひとりでありましたから わかりません。

註、　二十三歳になっていた玉城さんだが、父と妹たちとが、どこでどうして出あい、どうしていっしょになったかということが、今に至るまでわからないままになっている。

戦争によるあまりにも異常な体験故に、真先きに訊きそうなことを二十四年後の今日に至るまで、無関心で、空白のままに過しているのであろう。珍らしい人間の心理だと思う。

わたしたちは、四月はじめに家を飛び出して行った時は、みんなで十人でありましたが、安谷屋でいっしょになったのは、半分になりました。お母さんと下の二人、弟と妹は、前にお話ししました。そうして亡くなりました。

おじいさんとおばあさんは、八人がいっしょに、わたしがここをやられた時に、あの場合に一度にやられました。生命を助かり度いといって、みんな親戚がいっしょになっていたんです。あの時の八人は、わたしのお父さんのお父さんとお母さん、わたしのおじいさんとおばあさん。それからもうひとりおばあさんです。お父さんの妹ですが、家は別れていました。それからおばあさんの子供、わたくしとはいとこです。そのいとこたちが、四人でした。それから、前でいいました親戚のおばあさん、頭がはがれて、髪が屋敷のどこかに引っかかっていたと話しました。そのおばあさんと、みんなで八名になりませんかね。あの時は、いいえ、あの前から、美里に来てからも、弾が激しいのに、恐ろしい中を助かり度いと逃げ廻って、頭が利かないのでありますよ。それでどこをどう逃げ廻ったか、どこでどんなことがあったか、あちこちしかわからないのであります。今まで戦争のことは、思い出したくありませんでした。

註、　体の中の毒気でも吐き出したかのような気持ちが、玉城さんの表情に見られた。



## 比嘉清昌（四十一歳）　防衛隊

わたくしは一月の二十五日に防衛隊で浦添の製糖場に召集されまして、それから島尻の友寄に配置されました。そこであれやこれやの訓練とか指示を受けて、その月の二十九日喜屋武の方へ行きました。そこでは壕掘りをやらされましたんです。

その壕が完成して、二月二十六日から、防衛隊ではなく、今度は兵隊の訓練を受けて、お前たちは、同じ兵隊の飯を食うのだからといって、一等兵の肩章を貰いました。

いざ兵隊になったとなると、われわれ年をとった者には、体力やその他のことでショックを受けましたが、勇気も持たねばならないと自分ながら決意を固めました。

そうして球部隊の食糧部へ廻されたが、三月の下旬から、今度は弾運びが始まったわけです。喜屋武から首里の方へ、晩の八時九時、時には十二時頃まで弾運びです。

それから首里の第一線へ行くことになりました。熊谷という隊長でしたが、途中で、まだ早いから時間を待とうというので、避難民の入っている壕を、われわれは今第一線の戦争へ行くので、そこに休むからあなたがたは出なさいと避難民を追い出しました。

「兵隊さん今度の戦争をぜひ勝って下さい、それではわれわれは出て行きます」。

そういって避難民が出るのを見た時は、何ともいえない気持ちでした。ここから追い出したら、どこへ行くのか、壕があるのか、壕がないので砲爆撃にあらわにさらされるのではないだろうか。自分の妻や子たちも、兵隊からこんな目にあっているのだろうというようなことを思った時には、何ともいえませんでした。隊長や、上官から、避難民を壕から追い出せという命令をされて、それをやるのは、一番つらいことでした。

避難民から壕を奪って休んでいるんですが、いつまでも出発しないで、今日はもう行かんといって出かけないんですよ。隊長は、後備役ではなかったですかね。一晩中壕にいて、そのまま本隊へ帰ったんです。この隊長が、どういう報告をしたかは、わかりませんが、第一線の戦争に行って来たからでしょう。一週間くらい本隊で休んで、また出るんです。また、中途で、避難民を壕から追い出して、前と同じように休むんです。一晩中そこに隠れていてから、朝になったら本隊へ帰って行きます。第一線の戦争をして来たからといってでしょうか。また一週間休んでから、第一線の戦争へ出かけました。また途中で、避難民を追い出して壕に休みまして、一晩中そこに隠れていてから朝になって、日が上るとそこを出て、本隊へ帰るんです。鉄砲なんかありませんよ。竹槍を持って。三度同じことをやりました。それで戦争というものは、逃げ隠れしてこんなにやるものかなと思いました。その間、喜屋武の壕には、一か月くらいいて、戦争が悪化したので、真栄里の方に移動しました。

与那原の第二大里でですね。第一線に行く時に向かい撃ちされたわけです、アメリカに。あれはたしか、与那原から上って来たアメリカの軍隊であったと思います。その上、上空は飛行機がいっぱい飛んでいて、田圃に落ちる弾は、ほんとに雨が降るようで、あれくらい激しい戦闘はわたしは出合って見ないが、これでは危いから

といってすぐ近くの木の下に隠れたら、その近くに大きな瓶があるが、爆弾か艦砲の破片で上の方が割れている。水がいっぱい入っていると思って飲んだらそれが酒になっている。みんながそれを飲んで、飯盒の飯を捨てて酒をいっぱい詰めたわけです。さあそれからは酒飲んでいるからどこも怖じはせん。戦争の時は酒に越したことはない。これはユーモアーになるけれども。あの時の戦争は、酒がなかったらほんとに生きて帰ることはできなかっただろう。あの時残ったのは、五十名余りから十三名しかいなかった。わたしの戦争の経験ではあれが一番酷かった。第二大里というのは、目取真（めとるま）（大里村）へんです。

真栄里の壕に約三週間いましたが、壕といっても三名くらいずつ分れて、岩のちょっとした穴にいるんですが、壕の前で破傷風で死ぬのを見た時は、今先きのお話しのように、直撃で、やって貰ったら極楽だと思いました。

岩の広い口の壕をさがして入ったら、そこは昔の人の遺骨がいっぱい積み入れられていました。投げ込んだようにそこに山のようになっているんですね。それで人間の骨の上に板を敷いて、その上に毛布を敷いて、沖縄の方言で、戦争だから、あなた方の上に寝るが許して下さいといって寝たですよ。そうしたら三人共眠れないんですよ、どうしたわけか。人の骨の上にのっかって寝るというのは悪いから出ようではないかと出たわけです。翌日、その骨の上に、直撃を受けた。亡くなった人たちがそれを知って自分たちを出したなと思ったんです。それで、吹き飛ばされてまき散らされた骨をかき集めておさめました。

真栄里では、食糧もなくなって、飯は玄米でしたが、そこから退却して六月の一日に、お前たちは自分勝手に（行動）しろと言い渡されたが、是非いっしょにしてくれといった。兵隊といっしょにいれば、何か食べるものがあるが、避難民といっしょになると食べるものがない。それならついてこいというので、いっしょに喜屋武岬へ退却、三日くらい共に歩いたが、そこに爆弾の深い穴があって、足をすべらして落ちてしまって部隊を見失った。

五日目に（本隊を見つけたので）いっしょになったら、お前はまだ死ななかったのか、といわれました。軍隊というところは、大変なところだなあと思いましたね。

玄米を三合くらい持って、喜屋武部落に行きました。海岸に井戸があるので、そこで水を飲んだ。それから喜屋武の岬、井戸から一里くらい離れたところがありました。三日くらい水も飲まんし、生米しかかじってないもんですから、今度はおじやでも作って食べようかと、持っている飯盒に、潮水汲んで来て、玄米を炊いたんですが、どんなに腹が空いていても、全然一口でも食われんですね。食われんから、捨ててしまったんです。生米はかじったが六月の二十三日、一週間もご飯を食べてないから、少し残っていた玄米をかじりながら岩の上に眠ってしまったわけです。眠ってしまったら、グルリ巻いているもんな、アメリカ兵が。銃でつつかれて起きて見たら、びっくりして、手榴弾二つを持っているが、その気持が起きんわけ。手を挙げたわけ、拳銃を向けられているから。着物も取るし、それから服も軍服つけて、星もつけているもんだから、服を取られて猿股一本にされた。死ぬならもういいでしようという気持ちで、あれから裸になって、伊良波の広っぱにつれられて行った。

後に戻りますが、出て来いということは、船から絶えず呼んでいたが、それは信じないですよ。殺すつもりで、嘘を言っていると思っていたんです。それで、裸にされた時も、わたしはヒリッピン帰りで、多少ヒリッピンの言葉がわかりましたので、僕は兵隊だが、殺しに連れて行くのかとわたしが話したら、殺しはせんよ。お前は助かったよとやはりヒリッピン語でいうんですよ。

それで、お前これ食べなさいといって、肉罐や豆罐を持って来てそれでつかまえられてよかったという気持ちと、自分をすかして連れて行って殺すのでないかなという気持と半信半疑でしたが、伊良波で二晩寝て、それからよかったですよ。伊良波の広っぱは、キャベツがいっぱいあったので、その生キャベツをかじってくらして、それから屋良飛行場まで送られて、そこに四、五時間いて、屋嘉の収容所へ行って、屋嘉で三日間おりましたが、屋嘉では、何とか逃げる方法はないかなということも考えました。あの時からは衰弱しているわけです。ご飯も食べてないから水は豊富にあって、飲みましたが、下痢が始まったんです。下痢がはじまって、向うからカンカン包や携帯口糧などくれるけれども、チューインガムだけは食べたけれども、あとのものは全然食べなかったんです。

ちょうど三日目に砂辺の浜から病院船に、ちょうどよかったです。病院船にひとりひとり上るんですが、あのブラブラする縄梯子ですね。今手を離せば落ちるんだがと恐い思いをしながらようよう上って、船に乗ったが、船に乗ったらどこかに流しに行くのでないかと思いました。それで船内は、猿股ひとつで、他には何も着せない裸です。わたしたちの後の船は猿股もはかさない全裸（まるはだか）だったそうですが、わたしたちは猿股だけはつけさせました。

病院船は、南洋のサイパンへ行って二日碇船した時に七月四日の独立祭だったんですが、その晩には、独立祭というので大きなお握りが渡されたわけです。そのお握りのおいしかったことは忘られません。サイパンで船に乗ったら御飯をくれたものですから、二、三日したら元気になってしまって、元気になったもんだから今度は船の掃除をさせられ、甲板の掃除、一日中甲板作業をさせられたんです。ハワイに上陸する前になったらいろいろの服もくれたので、これは殺しに行くのではないのではないか。毎日ひげ剃りもさせるし石鹸も自由に遣わすし、しかし、体が汚れているので奇麗にさせてから殺すのかな、という気持ちもあったわけです。

ハワイへ上陸しましたら、ウワフ島の耕地の名はわかりませんが一週間いて、それからハワイ島のヒロへ行きました。

ハワイ島のヒロからわたしたちは、火山のあるキラウエアへ移されました。あっちでは待遇はいい方でありました。

キラウエアへ行って間もなくわたしは、従兄弟がマントンヒルというところにいましたので、連絡したら、その翌日、ガードマンが来て、お前はマントンヒルに兄弟がいるというがそれはほんとかときくんです。多分差入れしたんでしようね。それで、いとこが、ガードマンに、自分が責任持つから、一週間くらいうちに泊めさせてくれといったら、PWはそんなことは出来ないといったのを、逃がしはしない、自分が責任を持つといって、金やウヰスキーを贈った

ら、ゆるしてくれたといって、いとこのところへ連れて行かれて、一週間ばかりいて、連れられて帰りましたが、またしばらくして連れに来ました。お金とウキスキーをやると喜んで出してくれたんですね。しまいには向うから、また行こうでないかというようになりました。ガードはカナカ人で、お金は五弗ずつくれていたんです。

ハワイ島は待遇は、ホノルルよりは良かったんです。ヒロに二百五十人、キラウエアに二百人で人数が少いから。それでも飯がまずい、量が少いといってストライキをしたんです。そうしたら量も二倍くらいにして、いい物をくれるようになりました。

沖縄へ帰るというので、ホノルルで皆といっしょになりましたが、ストライキしたというので、わたしたちは、ホノルルに残っていたものといっしょに最後の船。沖縄へ帰ったのは新正月の何日でしたか日は忘れましたが、一番最後でした。今の琉球政府の仲村総務局長はヒロ組でしたが、帰りの船はいっしょですよ。

そうですね。この戦争についてはゆっくり話しますと二、三時間では話せません。今死ぬか、今日は生きたと思う日ばかりで、いきなり引っ張られて、兵隊ということで、ずいぶん、難儀もし辛いこと、戦友たちが死ぬ惨酷なことも見たりいろいろ、委しく話すと一日二日話しても足りませんが、一番何が辛かったかといいますと、前に話しました、避難民を壕から出した時の気持ちです。上官から命令されるので避難民を追い出さないわけにもいきません。われわれはこれから第一線へ戦争に行くのでここで休養を取ってから出かけるので出てくれというと、戦争勝って下さい兵隊さん、わたしたちは出て行きますからといって、子供達を引きつれて壕を出て行く姿を見る時は、同じ沖縄の人だちだし、その時は胸に五寸釘を打たれる思いがして何とも言われませんでした。

わたしの家族では長男が現地召集されて、戦死しました。北谷村のクルク山というところです。北谷だから、先陣部隊だったんでしよう。数え年の十九歳だったんです。

わたくしは、またとこんな戦争だけはあってはいけないということを沖縄に帰るとじきから、つくずくと思いました。どんなことがあっても戦争だけはないようにということを願って、この話を終りたいと思います。

## 安里要江（二十五歳）　家事

わたしの家族の構成を申し上げますと舅姑でお二人ですね。お父さん、お母さん。長男夫婦、子供が四名、親子で六名になりますね。それに娘の親子で三名。娘がですね、主人は朝鮮にいましたので、朝鮮では寒くて生活できないということで沖縄に帰って、そして子供二人と同じ家に集まっていたわけです。そうしてわたしたち夫婦と子供二人ありましたので、計十五名という大世帯だったんです。当時ですね、昭和十八年九年。そうして昭和十九年の九月に、わたしは二番目の赤ちゃんをお産するために、自分の実家であるこの喜舎場部落に来たわけです。那覇は危険性があるからあそこではお産してはいけない。安全な田舎の方に疎開した方がいいだろうということで、家族の了解を得まして、わたしは九月の上旬頃、



この喜舎場部落に来まして、そして九月の二十八日にお産をしました。ちょうどお産して十三日目に十月空襲があったわけなんです。それでその時は産褥中で、喜舎場に来てよかったわけなんです。でもちよっと悪いことがあったのは、その翌日なんです。十月空襲もすんでもう那覇の人があちらこちらの喜舎場の知り合いの家に入り込んで来た翌日なんですので、大変恐怖心を持っていましたのです。朝の六時頃でしたか、空襲警報らしいサイレンが鳴ったわけです。今度は喜舎場だな、農村を目がけているんだな、きのうで那覇は無くなったんだから、今度こそは、もう田舎だと、恐怖を持っていたからかも知れませんけれど。六時のサイレンが鳴ると同時にですね、うちの両親と、それからうちにおばあさんがおりましたので、自分の子供二人をつれて、暗いうちに、喜舎場の西側にコーヌヤー毛という山があって、そこに墓地があるんです。そこに荷物をかついで、お墓に行ったわけです。行ったら荷物を一旦置いて、子供もおいて、両親はまた荷物を取って来るからあなたがたはそこに居りなさいねといって、おばあさんとわたしの子供二人とわたし、結局四名です。お墓の前におりましたら、何だか爆音が聞こえたんです。無気味な音がですね。はてな、今度は喜舎場を目がけて来るんだなと、薄白く、明るくなりつつあったのです。お父さんおかあさんが帰ってからですよ、おうちに荷物取りに引っ返してから。これは大変だと思って、わたしは子供をおばあさんにだっこさせて、上を見ながら墓の庭ですね、墓の前の方。歩いて飛行機を見ようとしたらハブ（猛毒を持つ蛇）がいるのもわからないで、ハブのところへ足を突っ込んだんです。そうしたら、すぐパッとやられたわけですね。わたしは十月空襲の翌日、お産をして十三日目にハブに咬まれたのです。それからが大変です。ハブにも咬まれているし、足は動けないし、病院といって治療するところは、みんな避難していないんですよね、みんなお医者さんも。

そしたら母がまた荷物を担いで来たからわたしはね、今ハブに咬まれたんですよ、といったら、どんなハブだったか、と訊くので、小さいハブだったけれども、何だか、足が痛くてどうも動けないというと、

「じゃ大変だ、早くお医者さん行こう」。

「もう病院行ったってお医者さんはいないんだから、どうせわたしはね、この空襲、田舎に来たらみんなが死ぬんだからね、大丈夫よ、もういいよ、行かんよ」と諦観的の気持になったわけです。

「いいえ、そんなことではいけない、さあ行こう」といってですね、髪も振り乱して、足を強くくびってですね、病院の方へ行ったんです。

そうしたら病院はちようど避難しようとしているところだったんです。そこに大田病院があったんです。おじいさんがおられまして、それで、わたしは今行くところであった、ちようどよかった、早く手術室に行きなさいといって、ただちに手術して貰って、じや、おうちには帰らないように、墓にいって、湿布薬も上げるから、大丈夫だ、湿布薬で湿布をして置きなさい、もう動くなよ。あなた、うちにいたら危険だから墓にずっとおりなさいということで、墓におることにしました。それとともに田舎の風習としてです

ね、ハブに咬まれたら十日ぐらい家の中には入らないということが昔からのしきたりです。おうちの煤が疵に入ったら悪いそうです。それでわたしたちは墓に十日ぐらい、おばあさんと子供をつれて、昼中は見舞客も来てくれましたけれども、墓の中で生活してですね、今でもここに疵がありますけれどね。

それから友軍は、この喜舎場の周辺に、山部隊が駐屯しておりましたよ。それで、沖縄というところはハブがいると聞いてはいたけれど、まだ見たことがありませんが、どんな状態ですかといって、兵隊たちが翌日からみんなききに来るわけですね。不思議がって。

それで兵隊に、いい薬があるならくれませんかといったら、はあ、湿布薬ならありますよといって、そしてカルキがいいといいますから、そのカルキを貰ってですね。そこで湿布をして、足も動けないままに墓の中に入り込んでまあ十二日くらいでした、ようやく歩けるようになった頃は。空襲警報もかからなくなって、ちょっと平静になっていました。そうしてわたしもおうちに帰って、それから完全に足も歩けるようになりましたので、那覇に帰らねばいけないということになりまして、那覇に帰ろうとしたら、那覇はほとんど焼かれて、まあ、わたしの嫁いだうちは残っていましたけれども、行った時はもうとうに球部隊の将校のですね、宿舎にとられてしまって、おうちがないわけです。それでどうするかということで、行って一応相談して見ることにしました。当時わたしたちは砂糖委托商をしていました、貸金業とですね、肥料販売なんかも。そういう事業をやっていましたので、長男の兄さんと、おじいさんと二人で店を守ることにして、住宅は球部隊の将校さんにいて貰うことにしました。それでほかのおばあさんや娘さんや娘さんの子供さんとか、長男の兄さんの子供さんとかは、といいますと、わたしたちの主人の本籍地がですね、大里村の屋宜原（大里村湧稲国部落の屋取りで、東風平村屋宜原部落ではない）というところにあるわけなんです。そこにはちゃんと住宅も構えているのです。土地も持っているしですね。まあそこに行った方がいいということで、みんなそこに先になっているからあなたも行きなさいといわれたので子供をつれて、あの時は車もありませんから、赤ちゃんを負ぶって、四つになる子供は手を引っぱりながら、屋宜原まで行ったわけですよね。その屋宜原で年も明けて、三月まで屋宜原にいたのです。その大里村の屋宜原ですね。三月の二十三日だったとわたしはっきり憶えていますけれど、お彼岸の日だったんです。彼岸の日にですね、急に空襲警報がかかって艦砲射撃が来たんです。まあ艦砲射撃というものは、聞いたことはあるけれども、実弾が落ちて来たということはまだ経験していませんのでですね、最初は何かなと思いました。でも近くに炸裂する音が聞こえるわけです。これは大変だといって、みんな家族揃って、壕もちゃんと準備してありましたので、その屋宜原の実家のですね、壕に入りまして、その一日をしのいだわけです、二十三日。それから艦砲射撃は港川から来たのです、奥武、港川ですね。そこから来たもんだから、港川と屋宜原は近いんですよね。それで、これは大変だ、わたしたちは島尻は安全だ、喜舎場よりは安全だと思ってここに来たが、どうしようかということになってですね。ちようどこの屋宜原のうちは、大変広う



ございますのですね、四十坪くらいの建物でしたから。そこは山部隊の将校さんたちが二三名、宿泊しているんですよね。それは無条件ですよね。こういう大きなうちは全部そうなって、家族は下の方に引き下って台所とか裏の座敷に入って、将校さんたちが一番座、二番座にいて。それでそこの将校さんがいうことには、まずね、艦砲は港川から来たから、上陸するのはこちらからの可能性があるんだから、あなた方は、逃げた方がいいじゃないか。それなら、わたしたちが、軍の車を出すから、とおっしゃったんです。ちゃんと見取っていたんですね、上陸するということを。

ところがわたしたちは前にですね、疎開するために荷物を全部梱包して島尻に持って行ってあったんです。沢山の荷物をですよ、家族が十五人ですから。全部島尻に特って行ったり、那覇の水タンクの水を出してその中に保管してあったわけです。それでその荷物を取って来て、屋宜原からですね、二十四日の夕方でした。ちようどあの時七時頃だったと思います。家族はですね、荷物に乗っかって、友軍の車ですよ、石部隊の何中隊かわかりませんけれど。その方たちが、食糧から衣服やら全部車一台に積んで貰って、喜舎場へ来たわけです。わたしの実家はここ（手で指す）ですよ。ここから二軒ぐらい西がわのうち、その実家の前に停ったから、両親はびっくりして、あなたたちは九州へ疎開するといったのにまだ疎開してなかったのか、といいましたが、わたしたちは、その後空襲警報がずっとかかり通していましたし、それに兄さんの子供が甲辰国民学校（現在の下泉町にあった）の六年でありましたが、疎開船の対馬丸で遭難しておりましたので疎開はできませんでした。

「港川から艦砲が来て、あちら辺から上陸するというので、逃げて来たのよ」といったら、父母は、それでは大変だ、じゃあうちの壕に行こうといって、行くことにしましたが、壕といっても、ほんとの壕ではありません。墓を利用していたんです。亀甲墓は大変大きくてですね。避難するには大変都合がいいのです。前の方には爆風よけに土手をつくってありますのでね。それではそこに行こうということで、夜からですね、みんなそこに引っ越したわけです。荷物はうちの庭においてですね、一応そこに避難しまして、二十四日から三月三十一日の晩までおりましたら、情報がとっても悪いんですね。爆撃が物すごく来ますし、そうして北谷の方には木の葉が散らばり浮んでいるように舟艇や、軍艦ですね、そういうものが、昼間高いところの山の木陰に隠れて見ましたら物凄いんですよ。これでは大変だ。ここは陣地の近くだから、集中射撃が来そうだ。といいますのは、この周辺のあちこちに、陣地が作られていたんです。喜舎場に部隊が駐屯していましたから。

そうすると、耳をつんざくような物凄い爆撃が始まりました。この爆撃はいつ止まるか、あと何時間でこの爆撃が止まるかなという状態がつづきました。それは墓を出る前の四日間でした。それでとてもここにはいられない。もっと安全なところをさがさねばならないということで、喜舎場の上のミハルジーというところへ行きました。壕でも自然洞窟でもありませんが、大きな岩があって、それが垂れ下って、下の方は掘ったようになって人が住むことのできる穴になっています。それが見つかったわけです。それでおうちから畳を持って来て爆風よけをつくったり、食糧をいっぱい運んで来て、

不安でもありましたがここなら大丈夫だろうなといって待機していたんです。弾はですね、中城公園に行くように、壕の中から見えるんですよね。小さな隙間から北谷の海も見えるんです。ずらりと並んだ軍艦からビューンビューンといって弾が行くんです。

これは至近弾だ。これは遠くへ行く弾だ。至近弾の時は、急にパッと落ちパンと爆発する音が近くに聞こえるんです。ヒューヒューするのは遠いところに行くんだよというふうに、ちゃんとわかるようになってしまったんです。今度は中城公園の陣地を目がけているね。ああ、自分たちのところに落ちなくてよかったと、このような不安の中で二日間くらしたんです。その時は、北谷から敵が上陸しまして喜舎場の裏の今のゴルフ場ですね。あの辺まで米軍が偵察に来て、そこに駐屯していた石部隊の兵隊につかまえられたそうです。アメリカーがですよ。行くのを喜舎場の人が見たそうです。それで、アメリカーが来ているよ。米軍はもうそこまで来ているそうだよという情報が入ったわけです。そうしたら四月一日の晩ですね。機関銃のパラパラ、パラパラという音が聞こえるんですよね。

その時、うちのお姉さんが、隣りの壕で、友軍の一人の兵隊さんからきいたといって、情報を持って来たんです。最後の決戦場は首里だから、住民の人たちは、首里の後方に避難した方がいいでしょう、ということでした。

そうして姉さんは、大変だよ、このままここにいるとあしたはアメリカ軍の虜にされるんだから、一大事だ。今晩のうちに逃げようじゃないか、といいました。その時両親がそこにおりましてね。あなたがたはここまで来たのだから、そのまま国頭の方に抜けるのがいいじゃないかとおっしゃいましたけれども。いや、それではいけない、決戦場になる首里まで行けば、首里は最後の決戦場だから、あっちまで命をしのぐことができれば、わたしたちは生きることが可能ではないかということでですね。じゃ皆引越しましようといって、あの当時十人なんです。といいますのはですね、長男のお嫁さんは子供一人連れて実家が首里でしたから、あっちのお母さんを見るためにあっちに行って、長男の子供は前にいいました学童疎開で米国潜水艦に爆撃された対馬丸で亡くなりましたので、その十一人の家族が連れだって、ここ（屋宜原）から喜舎場の前に出まして、そして安谷屋を通って、普天間（宜野湾村）を通って、宜野湾の松並木といって戦前は首里まで松並木がつづいていましたね。その松並木の下を通って行くのですが、宜野湾あたりからは、いろんな爆撃を受けましてね。それから照明弾も引っ切りなしに打ち上げられるので、その時は、キビ畑の中に首を突っ込んだり、小さい溝の中に入って見たりしてですね、首里の儀保の壕についたわけです。今の曲り角なんです。橋がかかっておりますね、今電化製品を売っておりますあの店のところです。あの角の方に自然洞窟があって、西森の壕といっておったんです。道を行く人にここいらに壕はありませんかときいたら、西森に大きな壕がありますからあっちなら大丈夫でしようといわれたんですね。もう夜は明けて来るし、艦砲は激しくなるんですね。その壕に入ろうということになって、四つの子の手を引いて、乳呑み子を負んぶして、それに救急袋を子



供といっしよに背負って、それから着物は着たままです。モンペをつけられるだけ、上衣も、そうして上下四枚ずつ重ねて着ました。それはですね。汚れたり被れたりしたら一枚一枚捨てる覚悟をもってですね。そうすると、子供と救急袋を背負うのがせいいっぱいで、上下四枚ずつ着ていると、足の上げ下げにも困るくらいなんです。あの状態といったら話せないくらいです。ほんとに無我無中に壕ということしか頭にないから。

首里まで辿りついたら、壕に飛び込んだんです。壕に入ったら首里周辺のですね、儀保あたりの避難民がごった返しているんです。わたしたちも入らして下さいということは、一言もいい得ないんです。ただ入れればいい、頭さえ突込んでいればいいと思って入って見たんですが、この公民館くらいな広間なんですね。先に入っていられる方がたは、もう十日くらいにもなっていたでしようね、三月の二十三日くらいからだから。ちゃんと陣取っていられます。食糧もちゃんと準備していれて、薪木も持って来られて、何不自由のない生活です。わたしたちから見たら羨しい状態でした。わたしたちは着のみ着のまま、ただ壕さえあればいいというつき当りばったりの避難の状態でした。

家族十人が、やれやれと壕に入ったけれども、今度は、食事のことが心配になりました。それでも何も持っていませんので、一日は昼中、飲まず食わずでいました。艦砲が少なくなったらしいよと皆が話しているので、飛び出して行った。ちようどそこにですね、儀保の食糧営団の配給米が配給されていたんです。無償なんですね、あの時は。ずらっと並んで、わたしも下さい、わたしも下さいとみんなが叫んでいるんです。わたしも並んで貰って壕へ帰りました。今度は、鍋を持っていませんので、あちこち、余所のあき家をさがして、悪い気で取ろうという気持ちじやないんです。命をしのぎ止めるためには、どんなことでもやろうという気持ちですのね。あき家から鍋を持って来て、米をといで、いそいでですね。壊れた家の古材を薪木にするために持って来て、それで飯を炊きました。半煮えしたような御飯をですね、お釜ごと壕の中に持って来て、お握りをつくって、おかずは何もありません。それを十一人に配って、一握りずつで一日、一度だけ、それで我慢しなければなりません。この食糧営団の配給は、三日間だったんですね。それで食糧営団の人が四日目はですね、もう配給は一切できません。大変情勢が悪くなって敵は普天間まで来ていますからあなた方は大変苦しいでしようが、どこからか、自分で食糧をさがして下さいということになりましたんですね。それでわたくしの家族は、一日中我慢して、ぼつんと坐っていました。何も物音も聞こえないんですよね。でも時々はゴツンゴツンという響きが聞こえました。大へん大きな壕ですから。

五日目にですね、壕を出て、配給所のところへ行ったが、やはり駄目というのでこんな大勢の家族、どうしようかなと思って、どこかで食糧が得られないかと考えていると、汀良（旧首里市）の軍の米が爆破されてですね、砂みたいに米が盛り上ってあるんですよと大騒ぎしているんです。配給を取ろうとして来た人たちに誰かが来て知らしたんですね。わたくしは、それでは、わたくしたちも貰って来なければと思って、姉さんと二人で、袋を持っていましたか

ら、その袋のいっぱい二斗くらいもあったでしょう、担いで壕に持って来ました。持って来たらそれが玄米です。玄米ですから炊く時間がかかりますしね。これは大変だと思って、一升瓶をさがしてそれに五合くらい入れて、竹の棒でですね、昼中何の仕事もないんですからね。それをつついてですね、白くなったら何かに移してですね、それを夜暗くなって艦砲がとまってから炊くんですね。このようにして十日くらいいました。ちょうどその十日おる時にですね、鉄兜を被って武装している二人の学生がひょっこり入って来まして、新聞を持って、皆さん聞いて下さい、と大きな声でいうんですね。わたしは、その一言で、はてな、弟の声に似ているが、と思ったので、奥の方から這い上って行って見たら、やっぱり弟だったのです。わたくしは、もう弟が皆に言っている言葉は耳に入りません。終るのを待って、駈け寄って、武彦といいながら抱きつきました。弟も、ああ、お姉さんと互いに抱き合いました。わたしの弟は一中（旧制の県立一中、現在の首里高校の前身）を出て師範学校の二部の一年で、鉄血勤皇隊の一員でありました。

「あなた生きていてよかったね。」

「お姉さんはどうしてここへ来たんですか。」

「喜舎場まで行って、喜舎場から追われて来たけれど、お父さんお母さんは、もうとうに死んでいる筈だよ、喜舎場はもう駄目だから。お父さんお母さんもいっしょに行こうといったんだけれど、わたしたちはここがいいといって来なかったんだから。」

「わたしたちは、情報班だが、四月二十九日の天長節を期して本土からの大攻撃を友軍がやるから、お姉さんたちは、この壕で我慢していなさいよ、またあえるから。わたしは毎日でもお姉さんのところへ来るから待っていなさい、子供たちをしっかり守っていて下さい。」

弟はこういって別れましたが、その後からは来ませんでした。その翌日からは一段と敵の攻撃が激しくなって、後で聞いたのですが、弟たちは首里城の壕にいて、全然出られなかったそうです。それでわたしは、弟はとうとうやられたのかなと思って、不安な気持ちでした。

ところが、それから二、三日後、友軍が来てですね。いうことには、ここは今日明日かの問題ですよ。あなたがた、ここにおると、玉砕だと思いなさい。この壕にいる人は全滅だと思いなさい。

註、　この時点は、四月の十四、五日である。ここが今日、明日の問題だ、という友軍の言葉は、米軍の進撃の実情とはずいぶん食い違っている。米軍が最激戦地の浦添村前田部落の前面の要害を中心とする東は西原村中伊保部落、西はやはり浦添村城間前方の線は、四月二十四日まで守られ、前田が落ちたのは五月の十日で、なお浦添村字沢岻の独立第六十四旅団はその時も落ちていない。四月十四、五日に儀保、西森の壕が今日、明日玉砕云々は、軍が必要上住民を追い出すためではなかったか、ということが考えられる。

兵隊さんが、そうおっしゃいましたから、じゃ、どうしようかということで、わたしたちには那覇に自分の壕もあるし、那覇農園といってですね、壺川（那覇市）に大きな農園がございまして、その農園の裏には大へん大きな壕が幾つもあるということをわたしたちわかっていたわけです。それで、那覇農園の壕に行こうじゃないかといって、一晩かかりまして、首里から那覇は一里しか離れていませんけれどもね。いまいる壕を夕方出てですね。地雷が多くて大変危険ですが、あちこち見張って、それから時々、矜しの弾が来ますので伏せて見たり、歩いて見たり、午前の三時頃に那覇についたわけです。

那覇へたどりつきまして自分たちの家についたら、まだ残っておりましたんです。焼けてはいなかったんです。爆撃はあちこちされて大変ですけれど、県庁（現在の琉球政府庁舎のある場所）の前あたりは、物凄く、悲惨な状態になっていたんです。そうして、地雷があるから、大変です。あの付近は注意して歩いて下さい、気をつけて下さいと、友軍の歩哨があちこち歩いていたわけです。それから壺川に下りて、自分のおうちをいったん見てから、もうここには住まわれるものでないからと壺川に行って山城農園の壕に入って、それから四月いっぱいそこにいました。

そこへ入ってから四月、五月は雨ばかりです。食糧はどうしたかというとやっぱり昼は出てあちらこちらからかっぱらったわけです。商店や人の家から何でも残っているのを取って来るわけですよ。品物は何でも。それから首里から来る時、お米は相当持っていましたから、そこまでは生活をしました。昼は何もしないが、夜になると鼠みたいにこそこそあちこちさがし廻って、食物をさがしていました。それから五月の初め頃でした。もう那覇も駄目らしいと情報が入ったわけですが、あちこち歩き廻っていると、友軍があちこちから来ますから、情報はどうなっていますか知らして下さいとききますと、まあ、こうこういう状態。もう首里も駄目になりました。今那覇に向かっているんだよ、もうどこにも逃げられない、というので、じゃ、どこへも脱けられませんかというと、もう島尻に行くより他には道はないというので、島尻に集結することによって命が救えるものと思ったわけです。最後まで生き抜くものが勝ちだと念頭にあったんです。それで、そこまでは誰も怪我もしていませんから、歩きやすいわけです。そして那覇農園の壕から、午後の六時頃に出ました、山川（南風原村）のちょうどあの曲角あたりに来まして、もう百米くらいで山川の駅だよという時に、パンパン、パンパンと物凄い集中射撃が来たわけです、夜ですけれども。夜にこんなに射撃が来たことは、四月初めからこれまでまだ経験してなかったんですがね。これは大変だ、もう死ぬんだと思いながら、すぐ溝の中に子供もつれて、飛び込んで、頭を出すまいとしてそこに引っ込んでいました。約三十分くらいして、自分の前に寄って来るんです。お父さんおかあさんとみんな名前を呼ぶんです。誰さん誰だれと。ああ皆生きていてよかった。もう大丈夫だろうなと、あちこちさまよい歩いたから、那覇の壺川から山川までちょうど一晩です。山川の畑の土手の周辺の蛸壺壕みたいなのを見つけて一晩明かしたんです。昼中はそこで待機していました。物凄い攻撃もありましたけれども陣地でなかったからよかったんです。陣地へは、絶えず一定の射撃が来るわけですよね。それでもわたくしたちはどうしてもそこを巧く渡らねば、生きるか死ぬかの分れになる。その百米を突破するにはどうすればいいかということで、案を練ったわけです。それで、飛

行機は五時頃から飛びませんから、すぐ渡ろうねということで、そこを通過したわけですよ。その五時ちょっと前に百米を無事に通過できました。陣地の上には、時々ボーンと照明弾が上ります。陣地目がけてでしようね。昼に観測しているので、その距離で撃っているらしいんですね。那覇と島尻は、あの時は汽車はありませんから、歩いてしか。二、三か月の間、汽車は行き通いしておりませんでしたので、どこに陣地があるということは、ちゃんとわかっていましたので、山川のどのへん、国吉（旧高嶺村）のどのへん、友寄（東風平村）のどのへん、ということがわかるから遠廻りしても安全なところを行こうねといって、那覇から屋宜原まで、三日かかって行きました。

それから、屋宜原の自分でつくった壕に入って、その日から食糧は心配ないわけで、自分のうちの田圃で取れた米もありますし、お味噌もありますし、何でもありますので心配はないのです。やれやれ、やっぱりここから行かねばよかったねと話しあいました。

それから、その晩から出て、毎日壕掘りです。思いがけなくもわたしの実家の両親がわたくしたちのところへ来ました。それに両親の知り合いもいっしよに三人来ましたので都合五人にわたしの家族が十一人、全部で十六人になりました。昼中は、毎日壕掘りです。子供達はそばにおいてです。食事は、日に二度ずつ食べていました。

その時にですね、軍馬ではなかったかと思いましたが、馬肉を売りに来る人がおりましたんです。砲弾の中をくぐってですよ。女の人ですがザルに入れてですね、買いませんかといって来るんです。その時の値段は、一斤で八十銭か九十銭かぐらいでしたね。お金は布呂敷に包んで、相当持っていました。食べることさえ出来ればということで、お肉は一日越しくらいに買いました。今考えるとその肉は弾に当って倒れている馬の肉だったかもしれません。艦砲は時たま、恐いのが来ましたけれども、まあ、危険ということはなかったんです。その時までの艦砲は、陣地目がけですから。東風平の陸軍病院が、わたしたちの壕の炊事場と二キロメートルくらい離れたところにあったので、その壕を目あてに射撃するのですね。

わたしたちの食事は、壕から二百メートルくらい離れた家の中で、夜になってから男たちが御飯も大きなお釜のいっぱい炊いて持って来るし、肉も煮て来るんです。十六人の大家族の二食分くらいはあったわけです。まあそれまでは、まあまあのくらしでいられたわけです。五月いっぱいだったと思います。

ところが、大変な情報がながれて来ました。敵は、とっくに与那原（旧大里村）に来て、すぐそこに来るというんです。機関銃の音が聞こえたら、敵は近いということを今までに聞いて知っていましたが、ほんとにですね、機関銃の音が聞こえるようになりました。

せっかくここまでいきのびて来たのにですね、わたしたちはまた行かなければならないかということでですね、十六人の大家族が、ほんとに大変でした。荷物を背負えるだけ背負って、子供も手を引っ張って、四つになる子供だけれどほんとに小言一つ言わないで、歩かしてですね。履物もありません。跣です。時どき爆弾の破片が落ちてまだ冷えてないのを踏みつけてですね、焼けどしたこともありました。あの時は、まだ雨が降っていたんです、六月だけれども。



それで泥んこの中に破片があって、踏んで怪我したこともあります。それから屋宜原を出たのが初旬で、安里（具志頭村）に行きましたら、そこにも壕はありません。友軍と一般住民と組み合ってですね。それから友軍は、沖縄の住民は邪魔者だということを耳にしたわけです。あなたがたさえいなければ、戦争は勝てたのに、どうして疎開しなかったかと怒鳴られてですね。壕を貸して下さいということは一言もいえませんでした。それで軍隊の壕には絶対に入れません。それかといって壕はさがされないし、そして安里部落の動物小屋に皆が一夜を明かしました。そうしたらその家は、わたくしたちの砂糖取り引き先の方でしたので、くず湯をつくって貰って、生水ですよ、砂糖を入れて、さあくず湯をつくってありますよ、といって、水で溶かしたくず湯を一杯ずつ御馳走になったことは、今だに忘れません。そこに一晩を明かして、またそこにもいられないから行こうじやないかと追いやられてですね。だんだん追いやられて、それから真栄平（旧真壁村）というところでしたかね。真栄平に行く時にですね、ちょっと海の見えるところがありましたよ。ギーザバンタといっていましたがね。そのギーザバンタの左に海が見えて、右がわには陣地があったんです。ちようどそこを通る時に物凄い艦砲に会ってですね。その時は死ぬんじやないかと思いました。畑の中とか溝の中に首を突っ込んでやっと難を脱がれましたが、直撃さえ食わねば、爆風は土手や溝の中に伏せていればしのげたわけですよね。上から落ちて当るのは、もう仕方がないと断念していました。壕がないから直撃を受けたが最後死ぬんだ。だが爆風はよけることができるという意識があるわけですね。それは、経験で子供たちにもあるわけですね。そうして、穴の中に子供たちも入って難をしのぎました。

それから、ギーザバンタの右手の陣地でですね、大変沢山の薪木を積んでですね、何か金属板みたいなのを敷いて焼いているんですね。そしたらそのあたりを通っていると臭いから、何かねえといったら、友軍が戦死者の火葬をしているということでした。あの時までは、小雨が降っていましたが、木をくすぶらして火葬していましたよ、六月四、五日頃までは人を焼いていました。それからそういうのを見るのも厭になってですね。わたしたちも今日死ぬか、明日死ぬかはかりしれない自分の命ではありましたが気の毒にもなりましたけれども。わたしたち、死ぬのは今日あすの問題だということは思いながらもですね。まずできるだけは難を脱がれようということでですね。ずっとずっと前に進みまして、真栄平部落それから新垣（旧真壁村）部落それから国吉部落（旧高嶺村）、伊敷（旧真壁村）というところ、そういうところを点てんと一日一日。真栄平部落で一晩ですね。また国吉部落で一晩。もっとも恐わかったのは、新垣の攻撃が目に見えるところにいたのでですね。新垣の東がわ、真栄平部落だったと思いますが、そこの豚小屋に入っておって、新垣部落が攻撃爆破されるのを見て、これは新垣部落へ行っては大変だと思って、新垣部落は素通りしました。もうその時は壕はありませんから、豚小屋を目あてにさがして壕がわりに入りますが、戦前の豚小屋は屋根がありません。爆風だけよけられればいいというので、豚小屋しか入るところはなかったんです。

それで今度は国吉というところに行って、この国吉部落ではですね、ちようど屋敷と屋敷の間に排水路みたいなのがありました。そうして両方のおうちにはですね、それはまあ大変な避難民がごった返しているんです。でもわたしたちはそのおうちに入る気がしません。おうちに入っておったら大変だ。一撃くらったら大変なことになるんだから、じやこの排水路にみんな一列並びに入っておきましよう、といってその溝に坐ってですね、一晩明かしました。そうしてそこまでは家族がみんな無事ですよ。それで夜が明けると同時に朝六時頃ですね。その時から地名もわからん、土地もわからないからですね、夜は駄目なんで、どこに行っていいかわかりません。土地がわかればですね。夜分行っても大丈夫ということがありますけれども、その時、昼のですね、迫撃砲とかいろんな艦砲射撃などの合い間あいまを利用してですね移転するわけです。追い詰められた鼠のようにですね、わたしたちはさまよい歩くわけです。それで国吉の部落ではそういう一晩を明かして翌日ですね、忘れもしません六月の八日です。朝早く暗いうちに出かけましたら、わたしの実家の父と母が、わたしの後からわたしたちの家族は前から、荷物を背負うだけ背負って、わたしの上の子は母が手を引っ張って、わたしは赤ちやんをおんぶして、そして歩いていたらですね、伊敷からですね、真壁(字)に行くわかれ道になったら、うちの父がですね、右へ行ってしまったのか、わたしたちは左に来てしまってですね、真壁に行くんですから。父はひよっとしたら名城(旧真壁村)あたりに下って行ってしまったらしい。まあほんとにお祭りみたいな雑沓ですよね、避難するのに朝は。物凄い人出だから、どこの家族も団体で行く時はですよ、ああ、誰もいるんだな、まだ大丈夫だなといって、名前を呼び合って、避難がつづいているんですからね。そうしたらうちの母が、お父さんがいなくなっているよ、どこへ行ったかわからなくなっているよ、といったんですよね。それで引っ返してさがしても父は見当らない。そしたら母はしよんぼりして、わたしたちと行動を共にしたわけです。

そうしてわたしたちは、小さな丘のところに行きました。頂きには二、三本蕨鉄があったように憶えていますけれども、蘆をバックにして前は広っぱで畑なんですよ。わたしたちは並んで坐って、昼中我慢していたら、何時頃だったでしようか。突然、わたしたちの上にトンボ。あの時トンボといっていましたが飛んで来たんです。偵察機だったんでしようね。米軍の星がついているのがちやんとわかるんですよ。そうしたら物凄く低空して来てですね、わたしたちを目がけてひっくり返って、また飛んで行ったりするんです。

「あれはわたしたちを見ているんだよ、見られているんだよ」といい交していたら、それが終る瞬間、集中攻撃が来たわけです。わたしたちの坐っている前に、ボンボンボンボンと歩くようにやって来るんです。それは迫撃砲を陣地から集中射撃をしたんだと思います。艦砲ではありませんでした。後できいたら迫撃砲はそのように射撃したんだそうです。

それでですね、迫撃砲の集中攻撃を受けたので、わたしの母は、父もいなくなって、しよんぼりしていましたが、わたしの長男を引っ張って逃げて行きました。

ところが、母はその集中射撃で、弾に当って亡くなったらしい、



ということでした。それで、じやどうするか、そのまま葬りもしないで前に行くことはできないだろう。どんなことがあっても、夕方には出来るはずだから、まあ一応しのいでおこうと、真壁の部落に入ってですね、井戸の側に隠れていたんです。

わたしの母は、その日の十二時頃に足をたたき切られて亡くなったんですね。それで母が連れていたわたしの子供、わたしたちの長男ですね。それも駄目じやないかということでしたが、その時わたしは赤ん坊を抱っこしていまして、自分の命さえしのげばいいという心理状態なんですね。人間は追い詰められてしまったら、そうなるんですかね。

わたしの母が即死同様に、足を切断されて亡くなっているということは、近くにいた母の友人がいいに来てくれたんです。あなたがたのお母さんは、こうこうでやられたと。それで子供はときいたら、子供はどうなっているかわからん。お母さんは見たけれども、そのまま来ました、といったんです。じゃ艦砲がやんでから行こうといって、わたしの主人が五時頃からさがしに行きました。行ったらうちの長男は、おばあさんよう、おばあさんようと、死んでいるおばあさんを前にして、泣きながら呼びつづけていたんですって。それで父親に気づくと、わたくしのおばあさんが死んでいるよと泣きながらいっていたそうです。わたしはそれをきいて、よくも死んだおばあさんを前にして、物凄い迫撃砲なんかが来るのに、五時間も泣きながらおばあさんようと呼びつづけて生きのびたんだねと思ってですね。今でもあの時のことを思うと罪なことをしたと堪えられぬ気持ちになります。

母は子供の手を取って逃げているところを即死状態でやられたんですから、子供も爆風でやられて、あっちこっち小さい破片が入ってですね。真黒くした跡が体に残っていたわけなんです。数え年で四歳になる子供、長男で、主人がつれて戻って来ました。それで母が亡くなってから、長男を見る人はいないわけです。それでわたしは赤ん坊を負ぶって、長男の手を引っ張って歩いてですね。点てんと歩き廻って、どうしても壕をさがさねばならないということになってですね、真壁の部落の前をさまよい歩いたらですね、九日にですね、八日に母がやられて、その周辺をさまよって壕をさがしまわりましたら、ちよっとした石の穴みたいな小さい壕がありましたので、まあそこでも頭さえ入ればいいだろうといってですね、分散して家族十一人があちこち三つにですね。壕といっても岩の穴ですよ、砕石された跡の穴です。それでうちの舅がその穴に入ることができなくて、子供さえ助かればいい、わたしはいいよ、お前たちは子供達をよく護ってやれといって、穴の入口に頑張って、一晩すごされたことがあったですが、そうしたらちようどおじいさんの前に迫撃砲が来てですね、おじいさんは即死です。おじいさんは、わたくしたちがいる壕にのっかかって、死んでしまったんですね。舅のことを孫たちが呼ぶようにわたしたちもおじいさんといっていましたが、おじいさん、おじいさん、どうしたんですか、といっても、う、う、といったような気がしましたが、そのままなくなってしまってですね。そして、出ようとしても出られないのです。おじいさんは大きな体でしたから。それでお姉さんと二人で突きのけて、出まして、また子供たちも出して、おじいさんの冥福を祈ったわけで

す。おじいさん、わたしたちもついて行きますから、おじいさん先になって待っていて下さいね、と手を合わせてお折りをして、おじいさんを壕の入口にそのままほったらかして、今度こそは、大きな壕をさがさねばいけないといってですね。友軍の大きな壕があるということを聞いておりましたので、壕はどこにありますかということだけしかくりかえしききませんから、食べなくてもいい、穴の中に入って爆弾をよければいいという意識しかありませんからね、あの時からは。食べるのは何でもいい、どうにか生きればいいということで、一日一食くらい。畑へ行って芋をあさって来て、生芋をかじってみたり、砂糖キビを畑から折り取って来てかじったり、そういう状態が四、五日つづいていましたけれども、真壁の前に、カーブヤー（蝙蝠）洞窟（がま）という大きな壕があるんですよね。そこが何部隊かしりませんが、軍隊が使用していましたのでね、そこへ行きましたら、入り口は非常に大きくてですね、この公民館の広さくらいありましたんです。入口にはすすきがいっぱいしげっていましたが、そこに友軍が二、三人いましたので、恐れ入りますがわたしたちは、入る壕がありませんから、わたしたちの家族を入れて下さいませんかとお願いしました。そうしたら兵隊さんたちは、口を揃えて大声で、「出来ない、お前たちは戦争の邪魔ものだ」とまた怒鳴られました。

その時、わたしたちは、壕が目の前にひかえているのに入れないということがどうしてあるものかと思ったわけですね。それでその兵隊たちが水汲みに行きましたので、その合間に入り込んで行ってしまいました。そうしたらそこには一般民も入っているんです。避難民も。入口の方から入っていったら、そこではローソクをともしてですね、夕方でしたけれども。中の方は、沢山の人が、食糧をいっぱい積んで。あの時分は島尻あたりは、豌豆が相当に取れたと思うんです。豌豆だとか、澱粉だとか、そういうものを持っているということは、後でわかりましたけれども、その食糧を積んで、みんな悠ゆうと寝ているんですね。右側は友軍。この壕はですね、普天間の洞窟みたように右と左にわかれているわけです。それで左側は一般民、右側は警備しているんです。その軍隊の入る入口は、とっても広いのです。そうしてそこには大きな鍋がですね、三つかまどに並んでおかれてありました。炊き出しするところですね。そうして、そこを見ましたらですね、御飯が炊かれてあったんですよ。軍隊はちゃんとそこに食糧を置いてあったらしいんですよね。御飯炊いてあるのを見たらうちの子供たちはですね、かあちゃん、おまんま食べたいよう、というんですよね。そうしたらわたしほんとにごはん粒というもの上げてないですよね、四、五日の間。いろんなものしか食べさせてないから。それでもね、兵隊さんのものは、あなたたちが食べることはできないのだから我慢してね。戦争がやんだらかあちゃんが沢山とって来て上げるからとなだめたけれども、ごはん食べたいと、ほんとに泣く元気もない泣き方をするんですね。四歳の子供と三歳の子供、お姉さんの子供、お兄さんの子供、わたしの子供を入れて四名でしたが、その子供たちの泣くさまを見たらほんとに親はしのびないんです。どんな罪でも犯す気持ちになるんです。だからあの状態、子供の飢えているのをどうすることもできない時の親の気持というものは、経験している人でなければわから



ないと思います。たべたーい、たべたーいというもんですから、そこに炊き出しの、女の人がおりましたんです。こちらから行った女子青年だったでしょうね、よく知りませんけれども。それで、恥をしのんでですね、すみませんが、お握り一つ、おこげでも何でもいいですから下さいませんかと、もう恥も何もあったものではありませんでしたよね。するとちょうどその時にですね、炊き出している人がですね、辻（戦前の遊廓）にいた知り合いなんですよ。知り合いというのは、お姉さんが入院した時に、その辻のジュリ小（辻の女をそう呼んでいた）も入院していて、病院で知り合っていたわけです。

それで、あらッ、清ちゃんではないかといったら、むこうも、あらッ屋宜のお姉さんではありませんかというようなことで偶然に合ったわけです。それでわたしは小声で、

「ねえ、わたしたちはもう四、五日の間御飯を食べていない、どうにか出来ないの」といったら「ええ、お姉さん、ちょっと待っていらっしゃいよ、わたしが持って来ますからね」といって大きなお握りをですね、六個持って来てくれたわけです。慰安所の女にされていたんですよね。慰安婦として軍についていなければならなかったが、真壁あたりでは、慰安所も何もあったものではないのです。それでちゃんと軍属として、炊事婦としてその係になっていたんです。

そうしてそのお握りを貰ったら、その晩はですね、ほんとにおいしい御飯が食べられたといって、子供たちも喜んでですね、それを二回に分けて食べさせたんです。自分たちは、一口ずつ食べました。それで二日か三日かは持って来てくれました。ところが三日後はですね、軍隊もお米がないから炊き出しもできないということになって、その清ちゃんがですね、軍隊も食糧がないのでみんなひもじい思いをしていますので、もうありませんよといいました。それで、じゃ、自分自分で生きましょう。とにかく壕の中に入ったんだから大丈夫という時にですね、わたしがつれている赤ちゃんがですね、ちょうどあの時九か月です。わたしはごはんも食べていませんから、おっぱいもないわけです。水を与えようとしても水を飲むということの出来ない生れて九か月しかならない赤んぼですからね。何も与えるものがない。もうほんとに飢え死になんですよ。抱いたままですね。わたしはあのことを今だから話すことができますけれども、ほんとに罪なことをしました。抱いたまま餓死ですよ。もうそのまま自然消滅。命が消えてしまったわけです。冷たくなった子をですね、入って二、三日までは泣きもしましたけれども、泣くと頭を撫でていましたが、だんだん、だんだん泣かなくなるんです。その時から、炭酸ガスが充満して燈（あか）りが燈（と）もせないんです、その壕の中では。暗いところでですね、手さぐりしてですね、あなたどこにいるか、あなたどこにいるの、と名前を呼び合ってですね、自然洞窟の鐘乳洞の中をですね、尖（とん）がった石が沢山あるんですね、そういうところを手さぐりして平（たい）らなところをさぐり当てて、じめじめしたところに坐ったままで、一日、二日、三日とつづいていたわけです。そしたら子供がだんだん、もう泣かなくなって、すぐうえのうちのお姉さんに、うちの和子泣かないよといったんです。その時お姉さんも小さい子をつれていたんです。わたしの子供よりは

上で誕生くらい。和子ちゃん、和子ちゃんと呼んでも、うーとも泣かないんですからね、ただもうほんとに人間じゃないんですよ。動物みたいにですね。子供さえしっかり抱いていればいいという状態だったでしょうね。そばには四歳の子を置いて。わたしはこの九か月の子を抱きしめて、名前を呼び合ってですね、自然に命を消したんです。わたしはあの時のことを考えたくないんですけれども（このあたりでは、全身が悲痛の感に飽和しているらしく、いきをのみつつ言葉がつまり、泣きながらの話しが、当時を思い描いている様子であった）今度こそですね、二度とあんな戦争が起ったら大変だ、わたしたちはその経験をしたんだから。わたしたちの子供たち、子孫へ戦争の恐わさを、絶対に戦争こそ起してはいけない、それを知らせたいためにわたしはこういうことを訴えるのです。

そうしてですね、子供はなくなったんだから、お姉さんと二人で、じゃどうするかねお姉さん。

周囲は停電した芝居小屋みたいになって、あっちでもがやがや、こっちでもがやがや。話す声はですね、いろんな話。突破しようという話、ごはんが食べたい、青空を見て死にたい、お芋を腹いっぱい食べて死にたい、おまんじゅうが食べたい、そういう話声ばかりが耳に入るんです。ほんとにみんなですね、精神が異常になりかけていたんでしょうね。ノイローゼ気味になっていたんですね。そういう中に、わたしは死んだ子供を一日中抱きかかえて、お姉さんがおっしゃるのに、要江さん、あなたこんなに冷たい子を一日中抱きかかえていて、どうにもならないんではないの。

「いいえ、わたしは生きられる間は、子供といっしょにいたい。」

「それは大変だから、手さぐりして、二人で壕の中に埋めて置こうじゃないの。」

お姉さんがいいました。その時、主人もいるんですよ。主人は病弱です。肋膜をわずらって、兵隊検査も合格しないような状態なんです。わたしは子供の顔も見えない、壕に入る時見たままの子供の顔を思い出しながら、主人とお姉さんと三名で、とむらったわけです。壕の誰もいないところを手さぐりして行って、ここいらは人が、誰もいないから、この石を開けて入れようねといって、動物がするようにですね、自分の手で土をかき出して穴を掘って、「ごめんなさいね、かあちゃんも後でついて行くから、あなたひとりではないんだよ」ということをわたしは子供に言って聞かしてですね、その子供を埋めたんです。そうしたら、その翌日から四歳になる子が眩々を揑ねるんです。かあちゃん、ごはん食べたいようというんです。和子も死んでしまったよ、あなたひとりだよと話し合ってですね、顔も見えないまま、ただぽつんと一日の二十四時間という時間がすぎて行くのもわからない状態、もう精神が朦朧としてしまっているんですよね。お隣りでは、何だかへんな声をして、二階小（やー）のかまるー（女性の名）よう、お前はどこに行っているか（やーや、まーかいいんじようが）と言っていた狂気（さちがい）がいうような声がきこえるわけですよ。あのときの言葉がまだ耳の中に残っているんですよ。精神がみんな異常になりかけているんです。

ほんとにですね、ああいう状態の中で、また一週間がつづいた。そしたら子供があんまりせがむものだから、わたしはその時お金をお



腹（なか）にずっと巻いていましたので、入口近くに行ってですね、そこの自然洞窟の中に川が流れている、土瓶はずっと持っていますから、その土瓶を持って行ってですね、どんなものであるかわからないけれど、上の方ではお尻をつけて糞や便もしているらしいんですけれどね、それを汲んで来て、子供たちに飲まして、三日くらいは水ばかり飲ましたんです。水さえ飲ませばいいと思って。

そうして四日くらい経って、お握りを食べなくなってからですよそれは。食べなくなったから子供たちは、空腹で、も早や泣き声も出ない様子なんですね、わたしの四歳になる子も。これは大変と思ってですね、お腹に持っていたお金をこうして開けて、少し明るかったんです壕の入口ですから。そしたらですね、そこの地元の人が避難して、豌豆をですね、俵にして持って来たのを、上からドラム罐を流して火をつけられて、爆破されたことがあったのです。わたしたちも、そのドラム罐の洗礼を受けたんです。この豌豆の主は、その時にやられて、死んでしまったんです。その人は入口の方だったからね。わたしたちは、ずっとずっと奥の方だから、曲り迂ねって、何十メートルか行って、奥の方だから助かったわけです。

そういうことで、入り口の明るいところへ行けば、何とかなるだろうといって、百円札を二、三枚持ってですね、行ったらそこには、主は死んでしまって、豌豆が水にふくれ上っているのがわかるんです。豌豆があるということで、つき当りぱったり入れ物をさがして洗面器が見つかったので、それにいっぱい持って行ったんです。そうして子供に、かあちゃんは、食い物をさがして来たよ。おいしいおまんまだよと四歳になる子に手で与えたら、おいしい、おいしいといって、今だったら一粒だって食べられない生まの豌豆をかじって、お手てのいっぱいくらいずつ食べたんです。それを二日か三日くらい食べさせたんです。そうしたらお水が飲みたいというので、下の方に手さぐりで下りて行ってですね、汲んできて水と豌豆を交ぜて食べさせたのが三日くらい。それからですね、お金を持っていても何もならないからと思って、どうしても何か手に入れなければ、と考えてですね、入口に近い地元の人たちのいるところへ行って、お金は持っていますが何か売る人はいませんかといったら、わたしは砂糖がありますよ、わたしは澱粉持っていますよというんです。じゃ売って下さい。わたしは自分が食べるためにお願いするのではありません。小さい子供があって、今大変になるところですから、売って下さいといったら、その人が両手で掬ってくれたのが、わたしの片手のいっぱい。わたしはハンカチにそれをあけて貰いましたが、ちようどわたしの片手のいっぱい。そして百円渡したんです。お金はあの時まで通用しましたよ。その人は有難うといって受け取っていました。それからまたお砂糖がありますといった人へ、砂糖売って下さいといったら、百円でほんのこれだけ（拇指と人差指で輪をつくる）。わたしは、お金は沢山持っていましたから、もっとお願い出来ませんかといったら、もう出来ないよ、といいました。

そうしますと、それを水に溶かして与えることはできないのです。百円で手のひらいっぱいの澱粉、百円でひとかけらの砂糖ですからね、なるたけ長くあるように、時どき、嘗めさせました。それ

でも、これで子供の命はつなげたと思いましたね。

その時はですね、もう六月の十二、三日になっていたんですが、那覇警察署の国吉巡査という方がですね、二、三名でグループを組んで、ここをずっと下って行ったら、海へ出ることは間違いない、ずっと川が流れているから。それで、子持ちの方は待っていて下さい、と大きなかけ声があったんです。そうして二、三十メートル下に行ったら、水は流れているけれども鐘乳洞が垂れ下がって、どうしても抜けられなかった、ということで帰って来ました。

上に出ることは出来ない、米軍は馬乗り攻撃しています。上の方は米軍がガラガラ、ガラガラというような音、今岩穴をあけるガラガラーと音を立てる機械、名はわからないですがそれだったでしょうね、一日中それが鳴り響くんです。ハッパをかけるためだったんでしょうね。それに時どき戦車でも走っているのか、ゴーッと来たりですね。何か、カチンカチンという響きも毎日聞こえました。

馬乗り攻撃をされたら、艦砲が落ちないことははっきりしています。今日から馬乗り攻撃されているらしいという情報が、入口の方から奥にいるわたくしたちにも伝って来ます。そうして、避難民はみんな、声を出すなよ、声を出すと大変よ、といい合いますんですね。それに、馬乗り攻撃を受けたら、兵隊たちは、馬乗り攻撃になったぞ、お前たちは戦争の邪魔者だと怒鳴ります。わたしたちは、そういうのを直接ききもしましたが、このカーブヤー壕の時もそれと変ってはいません。銃剣ですか、それをガチャガチャさせながら大声で、

「子供は戦争の邪魔者だ殺してやるぞ。子供を泣かすと誰でもいいから殺してやるぞ」と怒鳴りました。それは、わたしの子供が死ぬ二、三日前から、朝、昼、夕と避難民の壕へ軍隊（友軍兵士）が来て、そういって脅かしましたんです。

それでわたしたちはその時ですね、自分の子供が泣かなくなっているのを、却ってよかったというような、安心もあったわけです。子供の死ぬ前のことですよ。自分の子供は、元気がなくて、餓死状態になって泣かなかったんだけれども、他の子供の泣いているのは、あんなに友軍に威しをかけられているんだから、自分の子供はおとなしいからいいんだと考えた時もあったんです。

そうして、あとでわかりましたが、壕の中に入っていた大ぜいの婦人がですね、子供を抱いてすかしているが、お乳や食い物がないのでよく泣くもんだから、友軍が注射して殺したのが沢山おったそうです。つまり子供のほとんどが友軍の注射で殺されたそうです。

「注射して上げようね、おとなしくなる注射だ」というふうに注射をされてその場で殺されたということでした。

その壕にいる時にいろいろな経験をしました。水汲みに行く時、二、三日の間はよかったけれども、四日目頃からですね、行く途中は人が死んでですね、真暗で手さぐりですからね、歩いて行こうとしたら、今まで人がおったところに、何だか冷たいものがあるんですね。とうに餓死しているわけです。死んで冷たくなって。そういう死人のところを通るのが恐くもないんです。そして、死体の上を股いだり、踏んだりして歩いて、水を汲んできて、子供に与えていたんです。

六月二十一日になっていました。上から、マイクの声が聞こえる



んです。そこには沢山の避難民が入っていました。

「戦争は終りました。皆さん出て下さい。わたしたちは、助けに来ましたから心配しないで下さい」。

何だかたどたどしい日本語の変な口調でしたから二世だったと思うんですよ。

その二、三日前に、手をあげて捕虜になった人が、中に大勢の避難民がおる、と伝えたから、米軍は二世に大きな懐中電燈を持たして、壕へ入らしたんですね。

わたしたちは、捕虜されたら殺されるという恐怖心で、絶対出ない、頑張って出ないということになっていたわけです。そうしたら「あなた方は生かして上げるんですよ。絶対に死なしません。助けて上げるんですよ」。

それを何回もいいましたけれども、二、三時間かかっても誰も出ようとしません。隠れろ、隠れろといいまして、絶対に灯りのところに顔を上げないんです。

「あんた方、ここにおったら、あしたは爆破かけますよ。死にますよ」といわれましたから、それではどうなってもいいから出ようじゃないかとあちこちで話しあわれ、出ることになりました。それで左がわの一般民の壕は、みんなさあっと出たわけです。三時間くらい説得されてから。

周囲にはずっとアメリカ兵が銃を構えて取り巻いていたから、どうせ死なされるにちがいない。わたくしたちは、いよいよ全滅だね。みんな出されて、その広っぱでうち殺されるんだね、と小声でいい合っていたんです。

出る時、殺されるだろうと思いながらも、ボロとか古い湯呑みとか古バケツなど、何かいいものがないかとさがして持ちますし、食い物が少しでもないかと見廻したりするんですが、あの時には食うものはもう全然なかったと思います、壕の中には。そうして、死ぬんなら青空を拝むんだから本望だ、といいながら出たんですが、そうして出たら、あちこちに卒倒する人がでますんですね、急に太陽の光線に当ってしまって、体力のない人たちが多勢卒倒しました。それでアメリカーは、その人たちに注射しておるんですよね、わたしは何でもなかったのですけれど。

それで米軍は、壕から出た大勢の避難民にCレイション、携帯用のレイションを配ったのです。お水もレイションの入っている空罐があります。それに汲んで来て、ひとりひとりに親切に配るんですよ。そうしたら、憎いあなたがたのものなんか食べるか、絶対に食べないと、小声で言うんです。ひもじいのはひもじいが、食べる気にならないんです。毒が入っているんだよ、食べるなよ、といって食べないんです。そうしたらある二世の人がですね、「これは毒は入っていませんよ。食べてごらんなさい。こんなに食べられますよ」といって、避難民のから取って食べて見せたので、ああ食べられるんだねといってですね。それではじめて一週間振りに口にしたのが、あのアメリカのCレーション、Kレーションなんかでした。それから、みんな食べたんですね。そうして満腹したら、またまた卒倒が始ったんです。それは長い空腹に、食べて水を飲んだりしたからというわけ。それで米軍は、この卒倒者たちに、また注射をしました。

それからみんな、トラックに乗せられて、伊良波に連れられて来ました。そこでは、婦女子は婦女子、男と別べつに分けられまして、主人とわかれました。

そこには一晩だけ明かして、宜野湾の野嵩に行きました。野嵩の前の広っぱですね、キビ畑をちょっと敷きならした、そこに約一か月いました。

それから主人は捕虜となったことははっきりしていますので、生きているとは思いましたが、殺されたのではないかという不安もありました。

その頃作業がありまして、作業員があちこち交流しますね、そういう時に、訊いたり、伝言したりするわけです。それでうちの人が、具志川村（美里村の誤り）の桃原部落で、わたしの実家の親戚の家で預って、元気でいるので、いつか連れて行くからという伝言が来たんです。その方はハワイ帰りでわたしの父といとこで通訳をしていましたので、ジープに乗せて野嵩まで主人をつれて来て貰いました。それは七月の末でした。

八月の初旬にですね、さらに久志村に近い古知屋開墾に移動させられて、そこでは主人もいっしょになって、家族三人、掘立て小屋ですごすことになりました。主人は病弱ですから、掘立て小屋にずっと寝通しでありました。掘立て小屋はですね、百人くらいずつ入っていましたが、班長がおりまして、勝手にはできません。割り当てですから、お姉さんや兄さんたちとは別べつの小屋だったんです。この掘立て小屋は、敷くものはありませんから、地べたに木の葉を折って来て敷いて寝ますが、じめじめするとまた木の葉を取って来て敷くのです。そのころわたしの主人は、着替えの着物は一枚もなくって、病気の体を一日中横たえているんですが、栄養になる食べ物は、ちょっぴり配給される米の他は、何もありません。配給は戦争中の何ひとつ食べ物がなかったのよりはよかったんでしょうが、その配給を、六斤カンカンといった罐詰殻（罐詰の食べ殻）に入れて土を掘って竈をつくって、拾って来た薪でお粥をつくりますが、これは、お粥というものではなくて、お粥のうわ湯くらいのものなんです。味噌も醤油もありません。ただそのうわ湯だけでありますから、だんだん衰弱して、栄養失調になりましたんです。ほんとに、何にも言わないでですね、寝たままそのまま死んで行ったんですよ。栄養失調というのはそんなものらしいです。その前の日まで元気だった人がですね、口元はとがって、痩せて骨と皮だけになってですね、それは八月の十六日で、古知屋開墾に行って十二、三日目のことでした。それでとうとうわたしたちは、親子二人だけになったわけです。

そうしていますとわたしの叔母が来て、わたしたち親子を見てですね、このままここにいてはあなたたち親子もこれでは死ぬんだから、わたしのところへ行こうといって、福山というところで、叔母のうちに引き取られました。

ですけれど、わたしは叔母の御世話になっていても、何もする気がしません。ただ水を汲むことしかしません。夫も失った。子供も死なした。舅姑も亡くなった。実家の母も死んだ。お父さんもどうなっているかわからん。弟も多分戦死しただろう。こんなにむごい立場で生きているよりは、直撃でひと思いに死んでいた方がいくらましだったかわからない、といった考えが絶えず起っていましたが、四歳の長男のことを考えて心を取り直すといったわけでした。

その長男はですね、母といっしょに爆風を受けた時に、肺にでも何か故障ができたのでしょう、ずっと真黒い鼻水が出ていました。顔は、右顔面から鼻にかけて、無数の細かな破片が入っていたので、ぶつぶつ、さわったら堅くて、顔の形も変っていました。たえず鼻から出る真黒いのが、それは肺の中で腐った血ではないかと思いましたが、それがですね、だんだん多く出るのです。診療所へも行きましたが、薬もありませんし、それから喜舎場の大田先生（福山に来ていた）に行って診て貰いました。これは、手術しないで、何でもないから心配しないでね、とおっしゃっているのに、医療施設の不完全な時に、わたしの長男は、ちょうど主人の四十九日目に、亡くなったんです。

もうそれからというもの、わたしは生きている甲斐はないという絶望に陥入りました。戦争もしのいで、親子三名で、那覇に帰って行って、おうちも造って、こうこうしようと生活設計も立てていたのに、主人を失い、子供を失ったわたくしは、生きる道が無くなったんです。ほんとに死ぬことができればねえ、死にたいというより自殺でもしたいという気持ちにかられてですね。自暴自棄になっていたんですよね。それでも叔母に勇気づけられてですね、戦争というものは五歳から以下は、島尻に行った子で生きた子はいない、みんな死んでいるじゃないか。あの時、小さい子供は死んで、何十人というのが、選ばれて埋められるのがあったんです。でもわたしは、ここまで生かして来たのに、どうしてその子を守ることができなかったかと残念で堪えられなかったんですけれど、ほんとに五歳以下の子供で生きているのはいなかった。栄養失調で、下痢がつづいて、だんだんだんだん死んでしまうんですね。

そうしてわたしは、今度の戦争はわたしひとりだけにすべての犠牲を背負わされたのではないかという気持ちにまで追いやられたんです。

そうですね。わたしの姑は、わたしたちの子供からはおばあさんとみんながいっていたんです。それでおばあさんはですね、ただ畑のそば、キビ畑のそばのですね、キビが被うているから見えないだろうといって、家族がそこに坐っていたことがあったんです。これは伊敷部落の近くだったのですけれども、畑と畑との間の溝ですね、そこにお尻を突っ込んで一日中（事実は午前中らしい）坐っておったらそこの前は陣地であったことがわからないわけです、わたしたちには。それで、ただ入って坐っていればいいという考えで。ところがその陣地目がけて急にですね、油脂弾投下が来たわけです。あれは大変恐いもんですね。何百坪という甘蔗（キビ）畑がですよ、一瞬にして焼かれましたよ。その陣地目がけて、油脂弾がパーアンと落ちたもんですから、ぱっと広がってですね、わたしたちは土手の下に坐っていたもんですから、大変だーといって、子供たちは土手から上へ投げてですね、自分たちは駈け上って子供を抱っこして部落に逃げましたけれども、その時おばあさんは、惜しいことに、おばあさん、おばあさん、早く出なさいという時に、もう火に巻かれてしまって、わたしは目が見えなくなっているし、子供をだっこしているので助けようとしても、助けられないんです。人間の高さく

らいの土手だから、見す見す見ていながらおばあさんは煙の中に取り巻かれて、ぱたんと倒れて焼かれていくのを見たんです。その一日は何ともいわれない気持ちでした。

わたしたちの家族は、出て行った時は十一名ということは前で申しましたが、わずか半年足らずの間に、九名が戦争の犠牲になりました。兄さんは防衛隊に取られましたが、幸いにも万死に一生を得て帰りました。しかし疎開船の対馬丸でも一人は亡くしましたので、四人の子供の中三人亡くしました。わたしたちは、十五人の大家族でしたが、結局十人があの戦争の犠牲になって、五人だけ生き残ったわけです。

わたしは生きる心を失なっていましたが、そうしていると、父が石川に生きていて、スペイン系部隊の通訳をしているということがわかりました。父はアルゼンチンに十七年間いましたので、スペイン語は話すことが出来ました。

それから弟ですが、これは間違いなく師範鉄血勤皇隊だから、健児の塔の人たちといっしょに玉砕したものと思っていましたが、これも不思議にも生きのびていることがわかりました。師範健児隊の玉砕した壕と隣りの小さい壕に友人三人で入っていたそうです。それで、友人三名がですね、手榴弾を持って、わたしたちはここまで生きのびても自分たちの同僚は皆死んでいるんだから、僕たちもつづこうではないかというので安全栓を抜いて爆死しようとする時に、何となし頭に浮かんだのが父母の姿だったそうです。生きていれば父母にあえることもあるんじゃないか、生きている人もいると思って、おい、馬鹿らしいぞ、そとに投げろといって外に投げたそうです。その物音に来たのがアメリカ兵で捕虜になったそうです。ハワイへ行って帰って来ました。

そうして、父は新しく結婚してまたアルゼンチンへ行きましたが四、五年前に亡くなりましたけれど。

弟は軍に務めて生活には困りませんでしたが、父が、こんな日本にいてはどうなるかわからない、アルゼンチンは平和の国だからぜひ来い。平和に暮せるところは南米以外にはないといって父に呼び寄せて貰い、妻子もあって、後の母とも仲よく幸せにくらしているそうです。

わたしは、今はここにいますが、彼岸やお盆には、欠かさずに、婚家にお参りしています。A橋際に、G商会というのがありますね。わたしはあそこの二男の嫁だったのです。

わたしが一番辛かったことは壕の中で、子供を死なし、一人の子が飢えていた時です。子供が飢えて食べるものがない時の母親は、どのように正しい正常な精神を持った母でも他人のものを盗み罪を犯すということを経験しているので言えます。

それからあのカブヤー壕ですが、わたくしは二、三年前に行きましたら、壕の中はすっかり塞がれて、人間が入ることができないくらいの小さい穴しかあいていませんでした。何だか、米軍が爆破して、日本兵を全部生き埋めにしたという話をききました。今入ろうと思ったら余程大仕掛けに発掘しないといけないと思います。

わたくしは、何としても、あの壕の奥に埋めた子供の遺骨を取って来たいということが、いつでも心にこびりついています。仕方がありませんので、壕の入口から石を拾って、遺骨の代りに持って来ましたけれど、今でもあの子に、ほんとに申訳ないことをしたと心が刺されます。

屋宜原にそのままいたらということはですね、わたしたちは喜舎場まで行ったのは余計苦労しましたが、屋宜原の人もみんなちりぢりに追われて、年寄なんかは全部亡くなっていました。わたしたちは後原(クシバル)へ行って安里へ行きましたが、後原の人もみんな逃げて、そのままいたのはなかったと思います。安里は安里で追われて逃げたわけです。アメリカーにつかまえられると女はおもちゃにされて、男や年寄子供は戦車で軌き殺されるということを兵隊からうんと聞かされていますので、首里から逃げたのも、みんなそう思っていたので、機関銃の音が聞こえると敵が来たといって逃げなければいけなかったんですよ。それで、これはまだ首里にいた時ですが、喜舎場から逃げ後れてつかまった人たちは、みんな米軍に虐殺されたものと思っててですね、戦争がすんだら、われわれが喜舎場へ帰って村作りしようと話しました。それは一つには、アメリカは今のところ中部から入っているが、友軍は国頭と島尻とから狭み撃ちにするんだから袋の鼠になるんだよ、という兵隊たちからの宣伝があったんですね。うちの弟でも、鉄血勤皇隊の情報部で司令部のある首里城にいたんですが、首里の壕にいた時、今度の戦争は、頑張り合いの勝負だといった情報しか持って来ませんでした。それを信じたのは、悪かったんですが、米軍につかまえられると、殺されるんだと、避難民は誰でもそう思っていたのではなかったかと思います。

註、同席の防衛隊で正規兵と共に戦争をした比嘉清昌さんが発言。「南の方、港川付近で米軍一万人全滅させたという報がありましたので部隊で祝杯を上げたことがありました」ということであった。

「今度の戦争はわたしひとりにすべての犠牲を背負されたのではないかという気持ちにまで追いやられた」という安里さん。終戦直後の苦しさ、悲しさは、この記録でもいくらか語られているが、それはその千分の一、万分の一といった程度のものであろう。安里さんの嫁ぎ先は、当時の沖縄の財閥で、夫はその二男坊であったが、大家族の中で舅、姑も健在で、何の不自由もない月日を送って来たのであっただろう。それが戦争のために夫も二人の子供も失ってしまった。舅、姑をはじめ大家族の大半が亡くなった。まだ二十五歳の安里さんは、わずか二、三か月の中に、夫の家とも形の上ではまったく縁がなくなった。そういう事情からも、生きる力を取り戻す苦しみ、「忘却」を自ら努め、月日の力によって、立ち直られただろうが、それをくわしく活字にすると一巻の単行本でなければ収められないのではないかと思う。